

博物館の髪飾り

博物館の髪飾り

佐々木 涼子

1

今が何と言う時代か、人は考えなかった。

時の流れはゆるやかに進んでいて、人びとはこれまで、そしてこれから、時は同じように流れつづけるのだろうか、漠然と感じていた。

昔ということばはあっても、ひとつには、死んだおばあさんが子どもだった時というような意味合いであり、さもなければ、すべてが寝静まった夜のた

博物館の髪飾り

だなかに独り目覚めた人が、ふととらえどころのない無限を感じておののく、そのような思いに似たおぼろな昔であった。

ほんとうのことを言えば、今という時にはいつも名前はない。それはただの今である。その今をもう一つ別の顔を持った時と比べて、時代という線で区切り、ひるがえって顔のない今に何かしら見分けのつく顔と名前を与えようとする。そこに、誤まりと傲りの一端が生ずるのだ。

人びとはまた、ここがどこであるかということも考えなかった。いや、そう言ってしまったては正確でない。人びとの住いは林を背に、なだらかな野原を

前にして寄り集まっていた。

野原の側から林を眺めると、木々は遠ざかるにつれてますます茂りを深くし、その先は森となり、そして山となった。

春が来て雪が溶けた頃、男たちが狩に出かけるのは、その山の中であった。女たちにはわからなかったが、その山はどこまで行っても果てしないのだと、男たちから聞かされていた。行けば行くほど森は深く、木々の葉群はむらは黒みを帯びて、だから山の向こう一帯のことを黒い森と人びとは呼んでいた。黒い森の中で道に迷ったが最後、勇敢な若者でも生きて帰ることはできない。乳のように濃い霧がどこ

博物館の髪飾り

からともなく湧いてきて、昼日なかでも夜のように暗い木ずえを、魔法使いが甲高くしゃがれた笑い声を上げながら伝えていく。村の老婆は子どもたちにもそう話して聞かせた。

野原のほうを見ると、遠くに小さな丘があった。だが丘まで行ってその向こうを見ると、やはり同じような野原がつづいていて、その先はどうなっているのか、知っている人はいなかった。

女たちは肥えた野を耕して穀物や野菜を作り、やさしい白い動物は人になついて乳を出し、子どもたちの仲の良い遊び相手でもあった。

人びとは心穏やかに暮らしていたが、いつ誰が定めたのかわからない決まりがたくさんあって、その入り組んだ仕組みが村全体をマントのように包んでいた。決まりがたいした支障も不満もなく守られたのは、それが人びとを危険から遠ざけるために、日々の生活から自ずと滲み出るようにして作られていたからだ。

村には長おさがいた。

村の長はその昔、すぐれた狩人であった。男たちが狩をし、女たちが畑を耕して、戦いのない平和な暮らしをしているこの村では、狩人としてすぐれていることは、誰の目にも明かな能力であり、人を治めるための確かな資格でもあった。

博物館の装飾

優れた狩人はただ勇敢であるというだけでは足りなかった。最も大きな収穫は、男たちのほとんど全員が参加し、黒い森で長期にわたって行われる集団の狩によってもたらされたから、それを誰より巧みに組織し、統率することができる者でなくてはならない。年によって微妙に変化する気候の移り変わりを観察、感知して狩猟の開始の日取りを定め、それに備えて男たちを幾つかの隊に分け、彼らの行動を指示する。迷路そのものの黒い森に分け入った後にも、全体の動きを一点高いところから把握しつづける能力が必要だ。もちろん自ら最も勇敢でなくてはならないが、しかし勇敢という資質は、じつとこ

ろあまり頼りになるものではない、と村の長はよく言うのであった。

命に関わる危険に出会えば、誰でもやみくもな力が出る。元気なときには自然、勢いがつく。だがそれは本物の勇気ではない。それよりもだいたいなのは引き際の勇気、獲物を追い詰めるだけ追い詰めて、いざ、ここという瞬間に、逸り立つ心の手綱をぐいと引くその気力。本物の勇気とは、自分の心に打ち勝つ力を言う。その力を持っている者が勇敢なのだと。

村の長に一番必要とされるものは、すぐれた確かな判断力と沈着、そして長年の経験に裏付けられた

博物館の髪飾り

知識だった。

だからなのだろうか。村の長の眼は、時として猛々しい炎の色を浮かべることがあったけれども、大方は研ぎ澄まされた刃のように堅く、そして深く静まりかえっている。まもなく老境を迎えようとしている今、人びとは彼の眼の中に、透徹した気骨が穏やかな安らぎへと移りゆくさまを見るのであった。

そろそろ跡継ぎのことを真剣に計らなくてはなるまい、と村の長は思う。彼には後を継がせる息子がなかった。だがそのことについて、村の長にまったく心づもりがなかったわけではない。思慮深い彼は今まで公の席で口にしたことはなかったが、後を託

す者について、すではっきり心を決めていた。

村の若者が一堂に会するとき、その中に青年の姿を認めてじっと注意深い視線を注ぐのは、その子はまだ幼かった頃からの村の長の習いであった。かつての親友の遺児の成長を見守ることは、村の長としての職務とは関係のない、それよりもっと深い、人としての責務であるように思えたし、年毎に一人前の男になっていく顔かたちの中に、類まれな勇者であったその父の面影が少しずつ、はつきりと刻まれていくのを見ることは、大きな喜びでもあった。

だがその思い子が少年期を抜ける頃から、彼を見る村の長の眼は変わってきていた。眼差しの奥に宿

博物館の髪飾り

る深い慈しみに変わりはなかったとしても、そこに信頼と期待とが加わるようになったのだ。

良い若者になった、あと数年もすれば小さな狩の陣頭に立つくらいのは力は十分備わるだろう。そして逞しい壮年となった彼を頭に描き、その肩に職務を託す日のことを思うと、村の長の心は柔らかく溶きほぐれるのであった。それがなぜか哀しみにも似た感情であったのは、村の長の胸に、その父と親友であった遠い昔から今に至るまでの時の流れ、そしてこれから迎えようとする老年への思いがあったせいかもしれない。

だがその前にやっておかねばならぬことがある。

青年に寄せる期待に狂いのないことは確かだし、この若者を推す長の意見は、さしたる反対もなく村全体の賛意を得るはずだ。そうは思うのだが、しかし、村の長という立場が決して見た目ほどに易しいものでも安らかなものでもないことに、彼はそうした折り、改めて感じ入るのである。

立派な長になってもらわなくては困る。そう思うと、村の長が青年を見る眼にはひとときわ厳しい光が差すのだった。

秋が終わりに近づいて、これから長い冬に入ろうというある夕べ、村の長は知者を家に招いた。

博物館の髪飾り

村の生活を万端滞りなく運んでいくために、村の長は数人の相談役を持っている。それは耕作の知識に秀でた者であったり、祭を司る者であったり、人びとの暮らしのあれこれの方面に、他に優れて深い知識と、それに基づく正しい意見を有している人たちであったが、知者もまたその一人だった。

とはいえ知者は、限られた部門の専門ではない。彼が携わっているのは過去の記録を読むこと、それを理解すること、そして書き継ぐことである。だが相談役たちの意見が分かれるとき、全体の状況を把握し、総合的に判断を下すことにかけて彼の右に出る者はない。そういう立場にあって知者はある意味、

相談役の筆頭であり、村の長に代わりうる者、またはその影のような存在であった。

だがその宵、村の長が知者を招いたのは、相談役としてではなかった。そうではなくて、むしろ青年の親代わりの心からだった。

早くに父を失った男の子に対して、父親のすべきことはししようと考えてきた村の長であったが、彼を自分の後継ぎと思いついて定めてからは、この若者にふさわしい嫁を探すことが、この老人の大きな懸案の一つとなった。

跡継ぎが良き人生を送るとすれば、それは自分の生涯もまた良きものだったと天に認められた証では

博物館の髪飾り

ないか。村の長にはそんなふうにも感じられる。それは殊の外おのれに厳しく律してきた男が珍しくも抱いた甘えのようでもあった。そんな自分に気づいた彼は、わたしも老いた、と密かに苦笑いをせずにいられなかった。

そんな折、彼の眼にとまった娘がいた。それが知者の一人娘だったのだ。もちろん青年が娘に向けてほのかに熱い心を抱いているようだと、知らないでのことではない。ある午後、いつものように青年に注意深い眼を注いだ村の長は、その遠い視線の行く先に一人の娘を見た。そして、それが知者の娘であることを認めると、この偶然とも必然ともつかぬ成

行に心から感謝した。

それにしても、村の将来を託する若者なればこそ、然るべき手順を踏んだ婚礼が必要である。その相手が知者の娘となれば、野原に咲く花が美しいからと摘むほどに事は単純ではない。

それにはまず自分が口をきくのが一番ではないか、そう村の長は考えた。

知者を招いたこの夜はじめて、村の長は青年を自分の後継にするといい心づもりを他人に漏らした。その後で、この永年の友人に向かって、娘をその伴侶として与える気はないかと相談をもちかけたのだった。

博物館の装飾

次の村の長に聞してはまったく異論はない、と知者はいつものように落ち着いた低い声で、だが長く考える暇も取らずに答えた。それは私自身も考えていたことだ。おそらく村人からもさしたる反対の声は起こるまい。あの若者は逞しく果敢だが、ものを見きわめる眼が深く鋭い。その二つの資質を兼ね備えることはなかなか稀なことだ、そう答える知者の声の確信に満ちた響きに、村の長は喜びと安堵を覚えずにはいられなかった。

「しかし娘のことは…」

と知者は言いよどみ、その先を続けかねるふうに見えた。彼は手元の盃を取り上げると、それを口に

運ぶでもなくもてあそびながら、注がれてあつた酒をじっとみつめ、ややあつて、視線を落としたまま、「いますぐに返事をするというわけにもいくまい」そう言葉をついだのであつたが、その声はいつもにもまして低く、かろうじて村の長の耳に届くほど、しかも思いなしか冷たい響きがあつた。

その対応は、村の長にはいささか納得しかねるものだった。後継ぎのはなしには難なく賛意を示しておいて、いったい何をためらうのか。胸にひいき眼がむくむくと頭をもたげた老人は、

「確かに今は身寄りのない身だが、知ってのように、あれの父親は名だたる勇者だった。あれもこの先、

博物館の髪飾り

必ずや……」

言いかけて、村の長はつと口をつぐんだ。知者の顔色が、そうしたことに對するまったくの無関心、いや苛立ちにさえ似たものを浮かべていたからだ。

「ま、わしの一存では返事はできん。妻の考えも聞いてみることは」

そう言う知者の声には、彼には珍しい頑なな淀みがあつて、村の長は先をつづける氣勢をそがれた。が、相手の声ににじむ微かな苦みが、どうやら娘を持つ父親のそれであるらしいと察した時、村の長は先刻の逸る気持ちにがにわか鎮まるのを覚えた。そしてこの永年の友人を眺める眼は柔らかくほぐれる

のであつた。

その夜は、話はそれ以上進まなかつた。しかしとりとめのない話題で盃を重ねながら、知者はなぜかいつまでも帰ろうとしなかつた。無愛想というほどでもないが、この男の冷徹な風貌は人なつこい世間話にはあまりなじまない。だから彼が日頃、用件を終えるとすぐに席を立ったとしてもふしぎに思う者はなく、逆にそういうところが、この男に寄せる人びとの信頼を形づくったとも言えるのであつた。その知者が、この夜はかすかに心定まらぬようすを見せ、村の長とただ二人、たあいな話題で初老の心を触れあわせる時を過ごした。

博物館の髪飾り

次の日一日、村の長は前夜の友の顔を思い返して、この婚姻の成否に危惧を覚えた。考えれば考えるほど、これに優る縁組があるとは思えない。しかしまた自分の知らない何らかの事情があるのかもしれない。そう思うとなおのこと、うまくいってほしい気持ちがつのつた。

なな一日をそんな揺れる思いに過ごした村の長を、二日後、娘の父が訪れて言った。

「母親がとても喜んでいゝる。そして私も…、同じだ」

村の長は深く安堵した。そして、本人の気持ちはどうだろうかと父に訊ねた。

結婚の相手は親や親と同年配の長老たちが選ぶの

が、村の習いだった。その決定に従順に従うのは若い者の義務でもあれば利益でもあると考えられていた。経験をへた親たちこそ、人生で何が一番大切かを知り抜いているのだから。しかし男女の結びつきは果物を選ぶのとはわけがちがつて、万人に共通の物差しなどない。本人の気持ちを無下に踏みにじれば大きな不幸が生じかねないということも、親たちはよく承知していた。

「娘も…」

知者は言いよんだ。そしてふと、この話をはじめめて聞いた時のあの微妙な表情を浮かべた。が、それを振り切るように、

博物館の髪飾り

「心配はない。妻がだいじょうぶだと言っている」
そう言い切って、薄く笑った知者の顔色をどくと
見て村の長は、友の心を陰らせていたのが、娘を手
離す父親の思いであったと確信した。

「寂しいか」

「いや」

知者は小さく答えて、もう一度、苦い笑いをもら
した。

結婚の祝いは六月の末に行われた。

麦の刈り入れが終わって人々が一息つく季節、い
つまでも暮れようとしないう明るい空のもと、人びと

は結婚の準備を当人たち以上に楽しんだ。結婚して
年数をへた夫婦は、子どもが寝たあとの長い宵を、
久

しぶりに手をつないでそぞろ歩きをして、昔を思い
出した。ようやく恋心を覚える年頃になった少年少
女は、自分たちの未来をこの度の花嫁花婿に重ね合
わせて夢を描いた。

そんななか、じつは誰よりも心が重く気持ちがあ
さいでいたのは、祝祭の主役たちであったかもしれない。
二人はそれぞれに、未来に対して微かな不安
を抱いていた。そのような思いはこれまで経験した
ことがなかったから、今の自分を幸せだとはとても

博物館の髪飾り

言いきれないように感じるのだったが、しかしこの道を引き返したいとは思わなかったし、皆があのように浮き立ち、楽しみにしてくれるのを見ては、いままさらやめることなど、とうていできない相談だった。

それにまた、みずからの心の奥を探ってみれば、そこには大きな喜びの予感があった。望外といってもいいその喜びは、わずかの時日の後に、ほんとうに自分のものになるのだろうか。自分のものになったとして、それをすっかり受け止めることができるのだろうか。力及ばず、取りこぼしてしまうのではないだろうか。

そんな思いは、しかし口に出して言うことはできず、また言うべきことでもなかった。二人はそれぞれの怖れと不安を抱きながら、たまたに相手に逢って、いっしょに人からことの次第を教えられ、なにごとか取り決めるようなときにもむしろ口数少なく、別れたのちにはまして孤独だった。それはこれまで覚えのないような、ふしぎに胸の波立つ孤独だった。そうして定めのを強いられるように日々を過ごし、やがて祝宴の日を迎えた。

若い夫は親から受け継いだ家に妻を迎え入れた。父と母に死に別れた後、ずっと家に残って彼を育ててくれた今は初老の女と、家を取り仕切るその夫

博物館の髪飾り

は、出来立ての若い夫婦を見て、目に涙をにじませて喜んだ。

2

明るいのだかな季節であった。その土地は明るい夏と暗い冬ではまったく趣が異なって、まるで別の土地のようだった。夏は目覚めた時にもう陽光が盛んな勢いではしゃいでいる。そして陽はいつまでも陰ろうとせず、人は夜を待ちきれなくて、まだ外が明るいうちに、薄い布で眼をおおって寝るのである。太陽は眠ることがないのだろうか。いいや、そん

博物館の髪飾り

なことはないのだけれど、夏はほんの少し休んだだけで活気に充ち満ちて起きてくるのだ。そして人間も動物も、太陽ほどではないにしても、明るい空の恵みに元気づけられ、心浮き立って暮らすことができた。

結婚がこの時期に行われる風習はおそらく、氣候の良さに助けられて若い夫婦が幸せを感じる人が多いようにという昔からの願いやえであったろう。始めが幸せで、その時にふたりが堅い絆を結ぶことができれば、これから出会う幾多の困難に対しても、しっかり立ち向かうことができるというもの。少女には気ままなつきあいを許さなかった代わり、

若い夫婦にはできるだけ多くの自由を与えるのが村の慣わしだった。夫婦だけのことではない。村人は大家族で暮らすのがふつうだったから、妻が夫の両親や兄弟姉妹となじむためにも、明るくて暖かい季節

は具合がよかった。妻を独り占めしたくなると、若い夫は彼女を夕べの野原に誘い出す。すると空はまだ明るくて、風はようやく涼しく、二人は村はずれの林まで足を伸ばして、いまだ満ち足りることのない恋人の時間を過ごすことができた。

しかし知者の娘と結婚した若き狩人には家族がなかった。

博物館の髪飾り

生まれて間もない一人子を残して両親が相次いで亡くなった時、村の長は赤子を自分の家に引き取ることも考えた。友の子を自分の子として育て、村の長たる自分の跡継ぎにするのは、息子のいない長にとってはおもしろ望ましいことであるようにも思われた。だがそうしなかったのは、残された男の子の血筋と家柄を尊重したからだ。あの父親の息子として成長させようと、村の長は思ったのだった。それで良かったのかどうか何度も迷ったが、しかし長ずるに及んで亡き友の面影を映すようになった男の子を見た時、長は自分の考えがまちがってはいなかったと確信した。

自分の子としない代わりに、彼はできるだけの配慮を怠らなかつた。気働きのある心がけのいい使用人を背後から監督し、財産の管理も人任せにしなかつた。何よりこどもが健やかに雄々しく育っているか、注意の慈雨を絶やさなかつた。それは青年を自分の後継にと心に決めるずっと前からのことだ。

新婚のふたりは広すぎるほどの家で誰に気兼ねなく暮らすことができた。それは村人の多くとちがつてとても恵まれたことだと分かっていたが、しかし何かしら気詰まりなものでもあった。

若い夫にとっては、幼い頃から遙かに見てはそのたび美しさに感嘆してきた女人がこれほど近くに

博物館の装飾

ることに、なかなか慣れることができないのである。そればかりではない。家の中までが、花嫁の持ち込んだ美しい布や器物で飾られて、見違えるように麗しくなった。住み慣れた家は、両親が生きていたときのままに保たれていたから、けっして飾り気がないわけではなかったが、しかしそれらは目に慣れて、そこにあることさえも忘れている景物だ。それにひきかえ今の家の中は、どこに眼をやっても、真新しい品物が美しい新妻を語っている。食事をする部屋の卓上の器物も、くつろぐ場所の壁際にどっしり置かれた長持も、寝る部屋のベッドに掛けられた華やかな布までが、若い夫を少し気詰まりな胸苦しい

思いにさせるのだった。

もちろん、それが嫌だったわけではない。嫌なはずもなかった。これがたぶん幸せというものなのだろうと、彼は考えた。そして幸せとは少々疲れるものだとも思った。

新妻にとってもそれは同じだった。近くで見ると夫は遠くから見たよりもっと逞しく、そばに寄せられると胸騒ぎがする。ちよつと怖く、それでいて慕わしく、わけもなくしなしくおれそうな自分の心をもてあました。どこか怯えにも似たそんな思いを胸に抱き込んで、ひとりで小さなため息をつくこともある。

博物館の髪飾り

けれども妻には家の中に仕事があった。知らなければならぬ事柄、覚えなければならぬ手順、慣れなければならぬ手さばきが無数にあつて、夫の育ての親ともいうべき老練な家政婦に手取り足取り教えられながら、日中の時間のほとんどを新しい学びのために充実に過ごしていた。

いっぽう新しい女主人を迎えた初老の女は、これまでの孤独な仕事から解放されたようにも感じていたし、若い女主人の良き側仕えになることをこれらの人生の最大の目標とも思い、それに何よりこの若い人はほんとうに愛らしくて心になつたから、誠心誠意、尽くす気持ちになつていた。こうして若

い妻は、夫よりも使用人にして先達でもある老女のほうに、先に心を開き、なじんでいった。

妻が家政婦と楽しげに笑いあうのを見て、夫はふしぎな気持だった。女ふたりが話しているのは、鶏の産んだ卵が今日はなぜか数が多かったとか、昨日の雨で緑がいつそう鮮やかになつたとか、それはまったく他愛のない事柄なのだが、妻が家政婦に向ける屈託のない笑顔は、いまだ自分には見せたことのないものだ。

母親代わりだった家政婦のほうでも、男の子に注いできた慈しみとはまたちがう親愛の気持ちで、若妻に接しているようだった。仲の良い女どうしは見

博物館の髪飾り

た眼にも快い光景だったし、自分にとって身近な二人の女性が親密に心許しあっているのは喜ばしいことだ。だがそのなかで自分の立ち位置はどうか、心もとない気もしないではない。自分の家にながら時々客人のような心持ちになるとは、どうしたことだろう。ひとりで寂しかったはずのこども時代にも、そんなことは一度もなかったのに。男はそう思っただけで空を見上げた。真夏の空はどこまでも明るく高く、陰りの気配さえ見えなかった。

家において、わが胸の高鳴りに疲れると、男は鍛冶場へでかけて行った。そこは彼の一番の友が働く場所、季節を問わず赤々と燃える炉と、寡黙に作業

する男たちがいた。代々の鍛冶頭の跡継ぎである親友は、こどもの時から父の元で修業していたが、その父が老いて疲れを訴えることが多くなった昨今、鍛冶場をほとんどひとりで仕切っている。

二人がまだほんのこどもだった頃から、そこはかっこうの遊び場だった。父親の鍛冶は幼い息子の性根に仕事をたたき込むには、まずは日常の遊び場にして馴染ませるのがいいと考えたから、神聖な職場への出入りを禁じようとはしなかった。危険なものもあったが、遠ざけるより身近に危険を識ることのほうが大切なのだ。

遊ぶには仲間がいたほうがいい。少年たちは頭を

博物館の装飾

並べて炉を覗き、顔を見合わせて恐れを飲み込み、手を握り合って金床に散る火花と音に耐えた。それがまたとない遊びだった。

青銅を鍛えて作るのは、狩で使う道具が多かった。だから、こどもの時分には気づかずにいたのだが、狩人の息子にとっても、鍛冶場の経験は将来の仕事に欠くことのできない重要な知識になるはずだったのだ。

新婚の男が入り口に姿を見せると、鍛冶場の若い主人は微笑みで迎えた。結婚式の前後、しばらく遠のいていた親友の到来はわけもなくうれしかったが、少しはからかってやりたい気持ちもないではない。

「いいのか…」

「ああ、まあな」

それが言葉すくない挨拶だ。そこにさまざまなり取りが込められて、ふたりはたがいに相手の言いたいことの、こそばゆい棘とげとその甘さを味わった。

友はいつもの仕事に打ち込んでいる。鍛冶の手順は、狩人にとってもなじみのものだ。粗鉄をどこでどのように精錬し、その塊をどのように鍛え、形を成すまで打ち上げていくか、そらで覚えている。もし訊ねる人があったなら、事細かく教えることもできただろう。その熟知しつつも、しかしみずから手を下したことのない作業を見ているうちに、新家庭

博物館の髪飾り

の胸騒ぎはふしぎなように鎮まっていた。見慣れた友の手の動き、その体の運びを見て、このうえもなく安らいだ気持になったのは、あるいは立ち動く母の姿を眼で追う幼子の心であったかもしれない。

男は自分の母を覚えていなかった。立派な家があったが、親の記憶はない。男にとって親兄弟になぞらえうるものがあるとすれば、それは鍛冶頭の息子、つまりこの友だったのだ。鍛冶場において安らげるというのも、そこに家族のようなこの友がいたからだった。

ほんのこどもであった頃から、この友にだけは思うことを言うことができた。人に対して気持ちを包

むことを覚える前から、ふたりはすでに友だった。

そういえば、狩人の息子が初めて知者の娘に対するほのかな恋心を漏らしたのも、鍛冶の息子だった。それは微かな、思わず外にこぼれてしまった胸の高鳴りだったが、目ざとく見つけて質したのは、友のほうだった。嘘のつけない友から訊ねられて、少年はすなおに頷いた。そして頷くことで初めて、自分でもしかとは気づかずになっていたその思いを、あらためてわが腕に抱えることになったのだった。

それ以来、鍛冶の息子は男の聞き役になった。もつとも、恋する少年がさほど多くを語ったわけではない。もともと口数の少ない性であったし、語るべ

博物館の髪飾り

き事柄もなかった。好きな娘と結ばれるのを許す村の慣わしでもなかった。ただ、秘めた思いを知っている友、それだけのことだった。

若い鍛冶にとって、友の思いを知ったことは、じつは幾分つらいことでもあった。彼もまた、知者の娘に憧れの眼を向けていたからだ。しかしそれが芽吹いてまもなく、まだ翼を大きく広げる前に友の思いを知ってしまった。少年は微かな痛みとともに淡い恋を押し包んだ。

こうして若き狩人の思いは友の知るところとなったが、鍛冶の思いはついに友に知られることがなかった。

狩人は鍛冶の仕事を眺めていた。一つ場所を動くことは少なく、長いあいだ息を詰めて見つめている。炎の具合から熱の上昇を計り、焼けた鉄の色から冷えの度合いを知る。非常な体力を要する仕事であるにもかかわらず、いつも身を凝らし、一点に集中している友のさまは、狩をする時の自分とはまったく違う。ほとんど対極にあるとわかっていい。自分は森の中を駆け、追われて逃げる獲物の息づかいと一体になって、激しく躍動する。森を走るとき、あたかも宙を飛んでいるかのように、おのが肉体を感じるものがあつた。足の下で大地がうねるのだ、まるでそのうねりにこの自分が飛ばされているかのように。

博物館の装飾

しかしその一方で、ここぞという状況を見定めるときの、まわりの一切が静まり返って動きを止めたかと思われる瞬間。その時の精神のありようは鍛冶と似ていると思うこともある。自分が留めの矢を射込む瞬間と、友がここ一番の槌を下す瞬間は、同じなのだ。

狩のない季節、男は鍛冶の仕事ぶりを見守ることで、ふしぎに気持ちのまとまりを取り戻すことができた。あるいはそれもあって、男は友の仕事場に顔を出したのだろうか。道具の出来映えは狩人にとっつきわめて大きな関心事で、それなしに最善の成果は望めないものではあったけれども、男が友を訪れ

る理由はそれだけではなかった。

日一日と暮れるのが早くなっていく。夜がどこかへ行ってしまったような季節は早々と過ぎて、人々は宵闇のしめやかな気配を喜んだ。日盛りは前にもまして肌を焼いたが、間近にしのびよる闇がそれを鎮めてくれた。

若い夫婦にも二人でいる幸せがしみじみと感じられるようになった。夕餉のあと、空の奥にはまだほんの少し明るさが残っているけれど、部屋の中は闇がしつとりと重く沈んで、小さな燭台が丸い光の輪を作っている。

博物館の髪飾り

その輪から少し外れたところで、妻は長い髪をほどこき、くしけずっていた。

赤褐色に輝く長い髪を、彼女は朝の身繕いで器用に束ねる。そうすると細いうなじが露わになって、始めのうち夫はそれを間近に眺めるのにも胸がときめいたものだ。しかし、そのか細い首筋は思いのほかの働き者で、立ち動く妻をいつそう澁刺とかいはいしく見せた。

昼の装いを取り、夜着に変えようと、女は髪を解く。どこでどのように止まっていたものか、二つ三つの留め金を外したとたん、くせのない長い髪は夕日の流れのようにすべり落ちる。それは何度見ても胸

をつかれるような、まばゆい光景だった。

櫛を取り上げて、女ははいねいに櫛けずる。頭の頂点から長い毛の先の先まで止まることなく、しかしゆっくりと一息に梳すいていく。時間をかけて、ゆっくりと、何回も何回も。すると髪の毛はしだいに滑らかに、艶を増していくように見えた。

梳きおわると、髪はまたひとつに束ねられ、首の横で豊かな房になる。それを見て、若い夫はいつもほっとため息をついた。胸をとどろかせて見つめる髪梳きが終わってがっかりしているのか、長い髪が形良く房に収まって喜んでいるのか、自分でも理由のわからないため息だった。そして寢床に入ると、

博物館の髪飾り

髪の房はまるで小動物のように妻の胸の傍らに身を丸めるのだ。

ある宵、夫は妻の後ろから近づいて、梳き終えたばかりの髪を手に取った。髪は片方の手の平からあふれ、さらりと下にくずおれた。こんどはもう一方の手もそえて、髪の流れを掬い取ろうとする。髪はどうか一つの束になって両手のうちに収まったが、それでも幾らかはこぼれて落ちて、細い筋を作る。夫の手はそれをも掬すくい取ろうと、またも片方の手で梳すき上げる。こうして右の手で、それから左の手で、繰りかえし何度も髪を掬うのだった。

それはまるで抱き上げても抱き上げてもしなだれくずおれる柔らかな女の体のようだった。抱きしめると腕にすっぽりと収まるようなのに、それでもかええきれずに心からあふれる女のようなようだった。男は夢中になって女そのもののような髪と戯れつづけた。

妻はじっとしていた。夫が髪にふれた時、始めほんの少し驚いたが、その後はただ、なすにまかせていた。時を忘れたように髪と遊ぶ手は、よけいな思惑から放たれて無心に妻の体に触れている夫の心そのもののように思われて、妻ははじめてほんとうに自分のすべてをゆだねていた。

しばらくして夫はわれに返った。そして、夢中に

博物館の髪飾り

なって髪をもてあそんでいだ自分がちよっと恥ずかしくなったか、

「髪というのは、ずいぶん重い…」

まるで重さを測っていたのだというように、言ってみた。

「そう？」

思いがけないことを言われたように、妻は答えた。幼児が少女になった昔から、髪はずっと長くしていたから、もう体の一部になってしまっただけで、改めて重いと感じたことはない。

とはいえ、髪が重いと男が言ったのも、ただの照れ隠しでもなかった。金色の男の髪は生まれつきく

せがあって、小さい頃はたくさんの小さな巻き毛が花キャベツのように頭を覆っていた。成人して本格的に狩猟をするようになってからは、視界のじゃまにならぬよう、心がけて短くしている。男にとって自分の手の中で重く流れる髪は、それまで知らずにいた秘密の宝物めいた何かだった。

髪が重いという夫のことは心に届かなかったが、妻はそれより、夫の手で持て扱われる髪の快さにくっつきまわっていた。どこまでもしなやかでいて扱う手の思うにまかせぬ千筋の糸は、たしかに自分なだけけれど、自分ではない男の心のさざ波を伝えて、あふれる思いで妻をいとおしんでいる。背後に隠れて

博物館の髪飾り

見えない男の、髪をまさぐる指の肌には触れないままに、その心にじかに触れた気がして、まるで魅入られたように身じろぎもならない。そして男に身も心もゆだねている自分に戦きながら、身内に大きな歓びが膨れあがるのを感じていた。それは今まで知らなかった新しい世界だった。

こうしてふたりはほんものの夫婦になった。

3

秋になった。

狩の季節が近づくと、村はこれまでとちがう緊張感で活気づく。

村を取り巻く深い森には、多くの獣が住んでいた。あるものは肉が食料になり、またあるものは毛皮が衣になり、角が飾り物になった。

森で獣を狩るのは危険な仕事だ。毎年、怪我をす

博物館の髪飾り

る者が出たし、時には人が死ぬこともある。それでも狩を止めないのは、まさしくこれが危険で勇氣と知力を必要とすることだったからだ。食べるための肉ならば、村で飼っている牛や羊で事足りる。衣にしても、麻をほぐして紡いだ糸で涼しい布を織り、羊の革をなめして柔らかく伸ばせば厚手の上着を作ることができた。

それでも狩が村で最も重要な、尊ばれる仕事だったのは、それが村と村を取り巻く環境を良い状態に維持し、集団でことを行う人の生き方の根本を示していたからだ。

定められた指針に従って、多くの男が一つになって全体のために行動する。そうした狩の経験があるからこそ、村は悶着もなく治まるのだ。いや、悶着は限りないが、あってもそれを最小限に鎮めることができるのである。人々は狩に習って、頭の指示に従い、仲間に譲り、おのれの立場に安んじることができた。狩は集団が秩序をもって平和に暮らしてゆくための必要不可欠な活動であった。

狩は人が生きるために必要な衣食住と深く関わっていたが、ただそのためだけの、いわば形振りなりふ構わぬ行為ではなかった。そうではなくて、あらん限り合理的に整備され、美々しく飾られた祭典だった。獲物を仕留めることが目的だが、たとえ仕留めずと

博物館の髪飾り

も非の打ち所なく整然と執り行われる狩猟は、人の心を高めてくれる。狩に赴く成年男子だけでなく、見送り出迎える女や子ども、年寄りにいたるまで、皆が心を一つにして感動に身をゆだねることのできる祭でもあったのだ。

生きるか死ぬかの、命に直結した仕事ではあったが、狩はしかし大いなる遊びでもあった。生死に関わる営みを、興味尽きせぬ遊戯、そして麗しい礼法に変えたのは先人の偉大な知恵ではなかったか。

ああ、秋の初めのどこまでも高く澄んだ空の下、装具に身を包んで出発する男たちの何と凜々しく、勇ましく見えたことだろう！　そして彼らが、肌

痛い寒風にさらされて村に戻る道すがら、獲物を携えて戻る肩の、疲れを滲ませた笑顔の、何と頼もしく、慕わしいことだろう！　帰りを待つ妻や子の何ととおしく、炉端の火の何と暖かいことだろう！　狩によって、人々は生きていることの喜びを感じることができた。生きていることの輝きがそこにはあった。痛みと影もなしにはすまされなかったが、それがあるからこそ、喜びは深く、輝きもいや増した。

結婚して間もない夫と妻にとって、初めて迎える狩猟の季節は大きな節目になった。

博物館の装飾

若い夫は村一番の狩人であった。そのことを妻が知らなかったわけではない。それどころか、それゆえにこそ縁組みだったので、しかし身近で見る狩の準備の詳細、いやそれよりも出陣に向かう気構えのさまは、若い娘が想像したこともないものだった。若妻の父は知者であって、計画に際しては最も重要な助言者だったが、自ら狩に加わることはなかった。過去の事跡に学び、思考を深める父の仕事もまた、それなりに精神の緊張が絶えることがなかったが、それは今、夫に見る気持の張りとはまったく異なるものだった。

夫は手慣れた準備に勤しんでいる。最も大がかりな組織づくりから細々とした手仕事にいたるまで、その過不足のない確信にみちた仕事ぶりは、そばで見ると、ひたすら賛嘆のほかほかであった。どんなことにも迷いはなく、確かな判断が下され、それは常に正しかった。そして喜びが心と体にあふれている。

離れたところから夫に見惚れている若い妻のかたわらで、彼を育てた家政婦が言う。うちの人がいづも言います、あの方は特別なものをお持ちなのだ。お父様も優れた狩人でいらしたけれど、その血筋というだけではなく、何か人並外れたものを、天から授かっているさると。

博物館の髪飾り

結婚して以来いつも甘やかに、少し恥じらうような目をしていた夫が、稀に作業の合間にこちらを見ることがあった。するとその眼があまりに強く真っ直ぐで、まるで妻である自分に気づいていないか、あるいは自分を突き抜けて他の何かを見ているようで、妻は胸を突かれた。けれどもそれは少しも嫌なことではなく、それどころか、優しい少年のような夫よりもなお強く、妻の心を揺り動かすものだった。狩人の妻はこうして夫を背後から見つめて胸をとどろかせ、体が熱くなるのを覚えた。ひととき波立つて鎮まると、それは妻の胸の底に沈んで、夫への尊敬となって固まった。

狩の出動は村を挙げての晴れの行事だ。まだ夜の明け初めぬ頃合いに、装備を凝らした男たちが一斉に村を出て行く。それを、女や子ども、老人が広場や道筋で見送った。張り詰めた表情の男たちは、家で見慣れたようすと異なり、勇ましく、輝いて見える。それが女たちの胸を騒がせるのだ。

若い妻は、陣頭に立って鼓舞し、かつは注意する夫の姿を、遠くから眩しい思いで見つめていた。狩の出動は幼い頃から見慣れた光景だったし、いまだ少年の面影を宿した細身の姿を一団のなかに探した覚えもある。

けれども今見るその人は、それとはまったく違う。

博物館の装飾

それはわが夫であった。遠くで、ひとときわ輝いて見えるあの人が、夫なのであった。そのことが、信じられないようでもあったし、また、ただ一つ確かなことでもあった。

男たちを見送って家に戻った妻は、部屋でひとり夫の姿を思い返した。夫が不在の家の中は心もとないほど広々として、人けなく感じられる。たった一人いないだけに、それもさしてにぎやかな人でもないのに、その一人がいないと、まるで世界から誰もいなくなったように寂しい、そう女は思った。

狩は始めのうち日帰りで行われる。夜明け前に出発して、宵闇のせまる頃、村に帰り着く。最初の日

々は拠点の設置と探査、それに基づく今後の計画が主な仕事だから、収穫もそれほど華やかではない。とはいえ小さな鳥や獣といった獲物の無いことはなく、分配されて持ち帰られたそれらが家々の食卓を賑わせた。男たちのいない空白の一日を埋め合わせして締めくくる、それがそれぞれの家庭の小さな祝宴だった。

そういう賑わいの時間がなかったら、村の生活はどれほど単調で、楽しみや張りのないものであったろう。過酷な労働でもあり遊びでもあって、収穫は宴の喜びをもたらす。それらすべてを包み込んだのが狩という活動だ。

博物館の装飾

結婚して最初のシーズンを迎えた若い頭領にとっても、この狩はとりわけ感じるところの多いものだった。

男は初めて、自身の力量について考えた。これまでも仕事に自信がないわけではなかったが、それはおのれと対峙して生まれた意識、いわば鏡の中の自分に過ぎなかった。そういう家に生まれ、そうなるように育てられ、そして狩の頭領になった。それは自然の成り行きでもあったが、何よりこの仕事が好きだった。選ばれてもいたが、気のつかないうちに自ら選んでもいた。選んで、そして励んだ。定めに従っただけでなく、そのための努力もした。だから

人一倍の能力も得た。それはとても幸せな成り行きであったが、同時にきわめて妥当な結果でもあった。そして自分にとって幸運な巡り合わせだということ、は、他の誰彼に対して誇るべき事柄ではなかったのだ。

だが妻を家に残して狩に出たこの年、男は初めて妻の目に映る自分を意識した。見送る妻にとって、自分はどう見えるだろうか。そのように、他人の思惑を気にかけて自分を外から見たのは初めてのことであった。そして男は生まれて初めて、誇らしきの感情を知った。それは妻への愛とまことに良く調和して、あたかも組み合った二つの指輪のように、男の

博物館の装飾

心の中で麗しく輝き、涼やかに鳴った。

しかし一番の思いは、帰るべき処があるということだった。これまでではどんなに森の奥深く分け入っても、そこから家を思うことはなかった。狩が終われば家に帰る、ただそれだけのことだ。だがいま男は、ほんのささいなことに寄せて、家を思った。家で待つ妻を思った。そのようにして、男自身はあまり深く考えることはなかったが、どこにいても家に結ばれているのであった。

もちろん、大方の時は家も妻も忘れている。獣の足跡を辿るとき、見つけた獲物を追い詰めるとき、そしてついに仕留めるとき、男は全身全霊をあげて

集中する。現下の標的以外のことを考える余裕はまったくない。そんな時は、頭も心も常より大きく膨らんで、あたかも世界と同じ寸法になってしまうかのような。はち切れそうな頭と心が、目前の標的のようになる。自分さえ消えて無くなってしまったような、あるいは自分が火の玉になって燃え立つような究極の時間が、男はとても好きだった。言葉ではない、尽くせないほどに好きだった。

だがその熱中の時が過ぎて、あたりが平常の色と形を取り戻すと、男は家と妻を思った。家と妻を思うことが活動の終止符でもあるかのように、心は家と、そこで自分を待っている妻につながった。そし

博物館の装飾

て、そんな自分に気がついて驚いた。

妻がいなかったときはどうだったろうかと考えてみる。思い出せない。仕事が終わったという安堵があ

ったことは確かだ。それは覚えている。達成感も開放感も、安らぎもあった。しかしそれは、いわば空っぽの開放感であり、中身の無い安らぎだったように、いま男は思う。そして、仕事の終わりに妻を思い、家につながれた今の自分を、そうでなかったときより確かなもののように感じるのだった。

生まれ育った家を、男は初めてほんとうにわが家だと感じるようになった。いや、昔からわが家であ

ったにはちがいないのだが、ここへきて、それがほんとうに意味を持った。家がなにゆえに家であるのか、やっと分かったように思うのであった。

狩の獲物の分配にもまた、前とはちがった関心を持つようになった。獲物は働きと立場によって分けられる。ごく若い時から人並み優れた手腕を見せたから、持ち帰るものも人より良かった。が、それはただ働きのほどを示しているにすぎなかった。例えば仕留めた鹿の角を広間の目立つところに置いたとしても、美味な柔らかい肉を持ち帰ったとしても、無めざましい活動を思い出すようになるだけで、無ければ無いで少しも構わないものだった。そんなも

博物館の髪飾り

のは無くても、あの輝かしい瞬間の記憶はしっかりと脳裏に焼き付いている。

しかし今はそうではない。自分の働きを語ってくれる物を、持ち帰りたいと願うのだ。自分で話すのではなく、自分の代わりに証言してくれる物がほしい、初めてそう感じた若い夫は、どうして男たちがあんなにも分配にこだわっていたのか、その疑問がやっと解けた。

狩の季節が終わると、村は冬の支度に入る。この土地の冬は長く厳しかった。しかし家庭を持った二人は、冬の寒さからしっかりと守られているように感

じていた。夫はひととき狩で家を離れて過ごしたために、家はいっそう居心地がよかったし、妻はひとりの時を過ごしたせいで、家に夫がいることをうれしく思った。結婚したての日々、ふたりでいてどことなく気詰まりでもあった頃とはまったくちがって、ふたりでいてやっと心安らかに、これがあるべきありようと感じるのだった。

ある日、妻がふいに気分が悪いようすを見せた。胸元に手を当てて、何かをこらえている。食事半ばに立った妻のどこか沈んだその顔色は、夫の心を曇らせずにはいなかった。それまで具合の悪いことなど一度もなかったのだ、あんなに元気ではつらつと

博物館の髪飾り

輝いていたのに、いったいなぜ、と思い惑い、ちょっとした妻の体調ひとつでそれほどにもうろたえている自分を顧みて、改めて妻の存在の大きさを思い知った。

しかし数日後、その不可解な不調が彼女の体内に芽生えた新しい命のせいだと知らされたとき、若い夫はもう一度、前とは別なふうにうろたえただている自分を見出し出した。

初めて気がついて自分で自分にあきれたのだが、こどもが生まれるということ、それまでまったく考えに入れていなかった。いや、夫婦にこどもができるのは自然なことだと、頭では知っていた。周囲

の人びとも、赤子の誕生を楽しみにして、それを口にしてもいたから、いつかはそのようなことがあるだろうと思っただけだった。それにもかかわらず、妻の体内に自分の命の先端が住みつく事実を、ほんとうにはまったく理解していなかったのだ。

夫の胸にはまず、大きなざわめきが起こった。その後から、まだ何も考える余裕のないうちに大きな喜びが湧き起こってきた。それはどこか恐れにも似ていたし、幾分かは戦いの衝動にも似ていたが、何とも名づけようのない、これまで経験したことのない感覚だった。そしてそれはやはり喜びと呼ぶ以外にない、前向きなものだった。その思いをせい

博物館の装飾

ばい受け止めながら、生命の連環という巨大な仕掛けに自分が組み込まれていることを感じたのだった。

夫の気づかわしげな眼の先で、妻の不調はやがて薄れていき、それにつれて、日に日にどっしりと腰をすえたもう一人の女が現れた。こどもの誕生を待ちつつも何もできずにいる男とちがって、ほかでもない自らの体内に別の生命を宿して落ち着いている女を、夫はふしぎなものを見る眼で眺めた。夫婦になつたばかりの頃のはかなげな愛らしさとはまったく別の、何か底知れぬ力をそのたおやかに丸みを帯びた体を感じて、幾筋にも綾をなし絡み合うおのが思いに、なすすべがないように感じるのであった。

そんなとき、男は鍛冶場へ行った。そこは灼熱の炎が燃えさかかって、つまらぬ困惑など燃やし尽くすように思えた。赤く焼けた刃を冷水に浸す音は、頭の中に靄なす思いを払い去るような気がした。そうして家の妻を思うと、わが子を身に包み込んで日々を生きる妻が、単純に大切だと思えるのだった。

友の鍛冶は刀の柄に絵を彫っているところだった。刀身の作りには、それを使う狩人の意見が大きく作用する。彼が出す細かい注文にどこまで応じることができるか、それが鍛冶の腕でもある。しかし柄の装飾は、いわば鍛冶一人の作品だった。柄に彫られた模様については、狩人は注文をつけない。出来上

博物館の髪飾り

がりを見て、賞賛するだけだ。そして鍛冶は、刀身の出来もさることながら、自分一人に託された柄の彫り物に内心、格別の自負を抱いていた。

細密な作業に熱中している友の背に、男はふと言ってみた。

「髪留めはできないか」

「なに…、だって？」友は振り向かずに戻した。

「髪を留める飾り物だ」

仕事中の友は何も忘えなかった。男もまたそれきり何も言わなかった。しかし、作業が一段落して、男の前に座ったとき、鍛冶はもう一度、訊ねた。

「髪をどうするって？」

正面から訊ねられて、若い男はちよつと頬を染めた。が考え考え、ゆっくりとことばをつないだ。女の長い髪が、このように束ねられて、持ち上げられ、丸められたのを、留める仕掛けを作れないかと。ことばで足りずに、男は両手を使ってその仕草をやつて見せた。短い巻き毛の狩人が苦心して長い髪をもて扱うさまを見せるのを、友は苦笑いしながら眺めていたが、やがてその意味するところをあらかた察すると、

「ふん」

ひと声言つて、考え込んだ。が、それ以上、何も言わなかった。若い夫もそのまま黙った。

博物館の装飾

それから数日が過ぎた。制作中の短刀を見るために、男はまた鍛冶場を訪れた。その出来映えは素晴らしかった。狩人の頭領は改めて友の腕前に舌を巻いた。

一本の短刀を間に挟んで、片や鍛冶であり片や狩人である二人が向かい合って座る。作る人間にとっても、使う人間にとっても、それはこれまでのどの刀にも優る逸品だった。

鍛冶から見ると、自分の手が作り出したものでありながらそのことが信じられない、あたかも神の手が触れたかと思うような冴えた輝きだ。

狩人の目には、掴むのさえもためらわれる、しか

し一旦心を決めて握ったあとは、自分の意志を寸分の狂いなく反映するばかりか、遣い手の思いを更に引き伸ばすであろう、そのような業物と想像できた。

自分の作り終えた物、自分がこれから使う物を前にして、鍛冶と狩人は思わずそれぞれの心中で深い祈りを捧げた。その祈りがこだまし合って、二人は互いの存在を心から尊く、かけがえのないものと感じるのだった。

思えば二人は幼い頃からともに遊んだ仲のよい友だちだったが、性格はまったくちがっていた。一人は考えるより先に行動する性、もう一人は動くよりもまず沈思する質だったが、しかしふしぎと気が合

博物館の髪飾り

って、どちらにも、いっしょにいる時が一番気持ちがいい。落ち着いた。

だが今、正反対でいながら補完する二人の間柄が、まさに短刀という物の姿で目の前にある。この刀を作る鍛冶がいなかったら、狩人は持てる力量を発揮することができないだろう。だが鍛冶にしても、それを使ってくれる狩人がいなければ、刀は真の存在理由をまっとうできないのだった。

こうして、鍛冶と狩人といふたりの友は、相手の存在によつてはじめて自分の力が明らかになりうる、そのような相手のいることに深く感謝した。

その日の帰りがけ、夕日の差し込む戸口まで狩人

を送った鍛冶は、ひと言、

「髪飾り、な」

「ん？」

狩人はとっきの合点がいかず、問い返す。

「髪、留めるんだろ。わからないが、やってみるか」

「……」

狩人は何とも応えず、横を向いて微かに頬を染め、友はそれを見て、声をたてずに笑った。

刀の制作が一段落したところで、二人の友は髪飾りにとりかかった。いっしょに初めてのことに取り組む心持ちは、まるで幼い日に返ってひたすら新しい遊びに熱中した時のように、二人の胸を若々しい

博物館の髪飾り

血潮で満たした。

とはいえ狩人にとっては、当初からまったくの思いつきでしかなかったから、何をどうして良いものやら見当がつかない。幼い頃から鍛冶場に入りして、猟の道具についてなら自分なりの確かな判断に自信があるが、それでも実際の作業となると手も足も出ない。

鍛冶のほうはと言えば、駆使できる技術はもっていたが、作るべき品がよくわからない。どういう形で、どのように使うのか、長さや厚み、湾曲の具合など、事細かに狩人に訊ねて、若い夫を困惑させた。夫の脳裏には、さらさら流れる豊かな髪とそれを丸

める女の器用な手つきがあるだけで、簡単な図形を描いて見せることさえ適わない。とくに絵心があるわけではないが、生きている鹿や狼の形なら、細部まで描き込み、説明することができたであろうに。

こうして奇妙な二人三脚の作業が始まった。二人の男は仕事のない暇な時間を、女の髪飾りについてとりとめもなく夢想して埋めることが多くなった。とはいえ狩人の夢想はいつになっても流れ落ちる髪の毛のものから先へ進むことはなかったし、鍛冶の思索は形や大きさ、厚みといったすこぶる則物的で殺風景なものであったのだが。

鍛冶は外で女たちの頭を眺めた。そんなに熱心に

博物館の髪飾り

女を見たのはかつてないことだった。それでも、見るのはたいてい後ろ姿だったので問題にはならずですんだ。もし前からそんなふうにしげしげと見つめられたら、胸をときめかせる女は少なくなかったにちがいない。そうでなくても、あの男がついに女に興味を示したと、評判になったはずだ。

女たちはじつにさまざまなやり方で髪をまとめていた。見たところ何の留め具もなくどうして髪が崩れずに丸めたままできているのか、まるで摩訶不思議な手品を見るような思いにさせられるものもあったが、たいていは丸めた髪を掌に収まるほどの木片や蔓つるを編んだ平たい物で押さえ、そこに細い棒を差し込ん

で留めていた。それを薄い金属で作る、できないことではない。そう鍛冶は思いついて、新しい工夫の喜びを味わった。武具や猟具の作り方は古く父祖から受け継いだもので、鍛冶はその腕前にかけては誰にも引けを取らない自信があったが、このように誰からも習った覚えのない新しい物を考案したことはなかった。そしてそのことが、これまで想像もなかった大きな感動を与えてくれることに始めて気がついたのだった。

手仕事は着々と進んでいった。始めてみれば、さして難しいことはない。楕円を更に横長にして湾曲させ、棒通しの穴を開ける。簡単なことだった。た

博物館の髪飾り

だ、実際に使用する人に訊ねるわけにいかないのと、手本になるものが存在しないのが問題だった。道具や品物というのは、作る人間の思惑の及び難いところがあつて、大きさ一つ、穴の角度一つで、使い勝手が良くもなれば悪くもなる。通常ならこれを修正するのが試作で、鍛冶が専門とする猟具や武具の場合なら、その段階で友の狩人の判断が大きな意味を持つ。成人した今も二人が緊密な関係を保っているのは、まさにその一点であつたのだが、こと女の髪飾りとなると、さすがの連携も役に立たなかつた。もはや仕上げに近い段階になつて、出来上がりつつある小さな物体を間に挟んで、二人の男は、これで

いいのか、と言葉には出さず目で訊ね合い、しかし答えを得られずに腕を組んだ。解けない疑念の裏には、妻に対する夫の、友を優しくからかう友の、遠い少女にあこがれた少年の、さまざまに揺れ惑う甘い思いが渦巻いて、しかし問題はついに解決されることになかつた。

そのようにして前例のない青銅の髪飾りは、制作者たちがついに確信を得ることのないままに完成したのだつた。

夫の持ち帰った髪飾りを、若い妻はとても喜び、その場ですぐに使つて見せた。あまりにあっさりと

博物館の髪飾り

使いこなしたので、不安だった夫が拍子抜けしたほどだった。しかし出来たての艶やかに底光りする青銅は妻の赤く輝く髪にすばらしく映え、豊かな鬘まげにこれ以外ないというように形良く納まっている。そして振り向いた女の眼に喜びがきらきらと弾けていたので、夫はこれまでのすべての悩みと疑いから一挙に解放されて、同じ喜びに浸ることができた。

それ以来、若妻は髪飾りをいつも身につけて離さなかった。差し方はいろいろに変え、真っ直ぐだったり、斜めだったりしたが、その髪にはいつも青光りする髪飾りがあった。

鍛冶もまた、村の集まりで髪飾りを見た。初めて

手がけた、そしてもう二度と作ることはないであろう細工物がこんなに晴れやかに、好ましい女の身を飾ることに、鍛冶は大きな満足を得た。大きさいい曲がり具合といい、思ったとおりだと、そこは工芸家としての矜持に背筋を伸ばしたが、じつのもろ豊かな髪というものはどのようにでも形を成し、ゆえに留め具の使いようは自由自在だということには思い至らなかった。

鍛冶が殊に気に入って眺めたのは、髪飾りの表面に彫り込まれた模様だった。他の部分は可能な限り夫の手を使った、いや使うように仕向けてやったが、模様は自分一人でやった。これは素人にはできない

博物館の髪飾り

仕事だという、そのことを口実に、まったく相談もせず一人で決めて、一人の時間に作業した。そして、これがあの遠い少女に向けた自分の思いの結実だと、言葉には出さずに胸の奥に刻み込んだ。

髪飾りは当然のこと、村の女たちを騒がせずにはいなかった。しかしどれほど羨ましく思ったにせよ、同じ物を手に入れることはできなかった。それは村にただ一つの、青銅の鍛冶だけが作ることができるもの、しかも狩の頭領の他には誰一人、それを作らせることはできないであろうものだった。そのことを誰もが知っていたから、狩人の妻の髪飾りは村で唯一無二の宝物になった。それを身につけることが

許されるのも、女が未来の村長の妻だからこそ、そう人々は得心した。

博物館の髪飾り

4

年月が過ぎていった。時に滞ることがあっても、けっして止まることのない、川の流れにも似た歳月だった。

若い男はがっしりと逞しい男盛りの頭領となり、いまや村の長の勤めも果たしていた。娘のように初々しかった妻は腰まわりの豊かな主婦になり、いつもこどもたちの誰かにまといつかれていた。

最初の女の子が生まれた時、未経験の母親は天から地まで乳飲み子のことですべからず、それでも無事に育つのか心もとなかったが、夫のほうはさらになす術もなく、そばで途方に暮れるだけだった。柔らかすぎた抱くのにも苦勞する赤んぼうは、それでも言葉を超えて愛らしく、そんな子を苦もなく抱きかかえて和む妻は、神々しいほどに美しく見えた。

こどもは次々に生まれてきた。二番目のこどもは少しは勝手がわかって、最初の子ほど心配も少なくてすんだ。三番目、四番目と増えるあいだには、母についても子についても、考えることはほとんどなく、ただ自然のままの出来事のように感じられるよ

博物館の髪飾り

うになった。女の腹がだんだん膨らんできて、充実しきるとある日、ぼと！と小さい人が生まれてくる。その経過はあたかも春に花が咲き、花殻の元が徐々にふくらんで、やがて累々とした実りになる、そうした季節の営みと変わらぬもののように思われた。

新しい来訪者は、むっちりふくれた小さな臉を上下びったり貼り付かせて眠っている。いかにも小さな弟か妹を、少し前まで赤ん坊だった兄や姉がぐりりと取り囲んで珍しがり、二人の親よりも喜んで騒いだ。

こうして自然のままにこどもが増えて、いつか男女取り混ぜて六人になっていた。じつのところ父親

は、こども一人一人の名前を呼び違えることもあれば、歳の順番を間違えることもある。それでもどの子も、かけがえのない大切な者であるのは確かだった。

気がつくとも男が一家を構えてから二十数年、村を治めるようになってすでに十年近い月日が過ぎていた。

仕事は順調だった。狩猟の腕はごく若い時から人々に誉められたものだが、自分でそうと自覚したことはなかった。どんな時も、できることをやっているだけ。その能力を少しでも伸ばすために日々刻々、技を磨いているだけだ。たとえば獣が残した微かな

博物館の装飾

跡からその行動を推察すること、足跡を辿り、追いつめること、見定めた的を正確に射止めること…、そうした行為は、ある意味とても端的で、これといった秘訣もないようなものだ。が、精神を集中し、繰りかえし事に当たっていると僅かずつながら確実に腕が上がってくる。それが喜びだった。そのためやっっているようなもので、狩はだから誰のためでもない自分のための楽しみ、なのでもあった。

しかし、年月を経るうちに、自分に備わっているある特別な能力に気がつくようになった。他の誰にもまして狩の技が巧みだということは単なる事実であって、虚栄とも慢心とも無縁だったが、事実は事

実として誰の目にも明らかだったから、それゆえに、人に指示を出し人を動かすことも容易にできた。もっとも、ただ狩が好きなかっただけだ、と人にも言い、自分でも思っていることに変わりはないが。

村の狩は集団で行う。狩に当たっては人の上に立ち、采配を振るうが、それは人の上に立たんがためではなく、頭領としての判断が抜きん出ている、そのことが最も大きな収穫につながるからだ。その信頼が狩の集団全体に行き渡っていた。

私心のない良い村長だとも、人は言った。それは確かにその通りだった。もともと人や村を治めることへの意志はないと言っている。だが狩を導いた経

博物館の装飾

験から、共同して事に当たる術は心得ている。それが人々を無理なく従わせた。

家にはこどもたちが戯れて賑やかだった。その向こうに妻がいる。若い頃に比べればふくよかに肉がつき、しかし相変わらず美しかった。以前よりもっと美しくなったと言ってもよかった。笑い声と泣き声の絶えることのない家は、生気にあふれている。不足はなかった。時に自らを顧みることがあっても、これで良いのだと虚心に思った。このまま、このようにして歳を重ねていけばいいのだと。

それなのに、気がつくとも男の心の片隅に小さな空白があった。疲れともちがう、満たされぬ願いとも

ちがう、奇妙な泡のようなものが感じられる。それは思わぬ時にふっと現れ、そして消えた。

村の狩の季節もそろそろ終わろうとするある一日の、夕暮れ近い刻限のことだった。

寒さが厳しく雪が深いこの土地では、村を挙げての狩は真冬を避ける慣わしだった。冬の狩は装備が大変なうえに危険も大きい。男が長く家を空けるのも生活に不都合が生じやすい。それよりは家族とともに長い冬に備える手仕事をし、身を守って過ごすほうが賢い。

男たちは片付けの作業に忙しかった。彼らを指揮

博物館の装飾

しながら、頭領はふと眼を森の奥にさまよわせた。森は近づく冬を予告して黒みを深くしている。もう少し日数を経ると、ほとんど見通しがきかなくなるだろう。彼方の木々はまるで別世界からの幻影のようになり、茫漠とした姿を列ね、その足元を薄くまだらな霧が洗っていた。

その時だ。遠くの木々の間をすり抜けていく白い影を男は見た。

白い豹！ 男は反射的に眼を凝らした。だが次の瞬間にはもう、何も見えなくなっていた。

家に帰ってからも、男は白い影のことが忘れられず、時折ふっと脳裏をかすめるのを感じては思いに

沈んだ。

それから数日というものの、白い影が姿を見せることはなかった。当然だ、白い豹なんかであるものか、ただの気の迷いだ、男はそう自分を嗤ったが、しかし気の迷いなどというものからは最も遠い人間であるのも確かだった。少なくとも、自身も周囲の者もそう思っていた。

狩の最終日が来た。森狩の本拠、狩猟小屋を閉じる日だ。戸や窓に板を打ち付け、雨風に対する守りを固めると、この日限りの狩人たちは機材を担いで森を去ろうとしていた。

男たちは森の出口に向かって歩いていた。先頭に

博物館の髪飾り

立つ頭領は全員の顔ぶれを確かめるように、時々振り返って行進のようすを見る。誰も欠けている者はない。病む者、大きな傷を負った者もいなかった。無事に帰れるのは当然、とはいえありがたいことだ、頭領らしくそう思って、ひとり頷いた眼の端を、またあの白い影がかすめて過ぎた。

男はすばやく首を回して、その方をキツと見据えた。今度は確かに動くものが見えた。しつかり見たとは言えなかったが、残像が眼の底にあった。

男は家に戻ってからも白い影を思った。忘れる時もなく思いつづけた。

あれは白い豹ではないか。村の言い伝えに聞く白い豹ではあるまいか。そのことが昼も夜も頭を離れなかった。

森の奥に白い豹がいる。そんな古い言い伝えが村にはあった。幼い頃から、祖母や母がこどもに語って聞かせるおとぎ話の一つだった。お話だから本当のことだと、ごく小さい時には誰もが考えたが、お話だから本当のことじゃないと、少し大きくなると思うようになる。ほんとうじゃないと思うようになって、お話はけっして消えて無くなるわけがなく、心の隅に処を得て居すわった。誰もがそうだった。しかしあれは本当にただのお話だったのだろうか。男はそう考えるようになった。白い影を見たとき、

博物館の髪飾り

深く考えるいとまもなく、白い豹！と直感したあの突き上げるような衝動。それはあまりに生々しく、その時点ですでに、白い豹が実在するかどうか、お話は真実か否か、そう疑ってみる次元を越えていた。まことに端的に、白い豹に向かっていたいこうとする熱い力が男の内に湧いてきたのだ。それだけが実感だった。その力を男は抑えることができなかった。

白い豹の言い伝えは余白でさままなことを語っていた。豹は神の使いであるから、決して狩の対象としてはならぬ。もしもこれを傷つけたり殺したりすれば、村に祟りがあるのは必定。その代わり、そうした暴挙さえ控えるなら、白い豹は決して害をな

すものではなく、村を守って幸いをもたらす、と。

白い豹を見た人についても、幾つかの話が伝えられていた。狩の達人が神技かみわざといわれるほどの腕になると、これを見ることがあるそう。白い豹は、それを見たことそれ自体が一つの恩寵と言ってもよい。ごくごく稀にそんな狩の名人が出ることもあるらしい。もつとも、それもずっと昔のことで、われわれやわれわれの親たちの知る限りでは、そんな神がかりの名人に逢った者などいないのだけれど。

とにかく、そうっとしておかなくてはいけない。これもずいぶん昔のことだが、一人の狩人が白い豹を見て、これを追った。けれども果たせず、命を落

博物館の装飾

とした…。

村の狩が終わった後も、男は一人で森に行った。それ自体は別に珍しいことではなかった。集団の狩を組織する頭領には、森のこと、獣のこと、狩の技のことで、知っておかねばならぬこと、準備しておかねばならぬことが限りなくある。指揮する者は、集団とともにある時と同じくらい、一人でする仕事が多いのだ。あらかじめ考えておかなくては、いざという時の判断など天から都合よく降ってくるはずもない。

しかしそれまでの森歩きとこの時のそれとは、いささか違っていることを、男自身もよく知っている。

長い冬の向こうの次の狩のことを考えながら、眼の端で別の何かを探していた。鋭い目配りと抜群の動の対象がもう一つあった。それはあの白い影、白い豹かも知れぬ生き物だった。

冬の森は魅惑的だ。どこまでも深く深く収斂していくような奥行きが延々つづいているが、その暗がりから、つと小さな窪地に出ることがある。するとそこはあたかも白く輝く雪の宮殿で、小さな天空の窓から貴重な陽の光が降り注いでいる。ある意味、至福の別天地だが、じつはこのうえもなく危険でもあって、未熟な人間はそこで自分の位置を失い、自分を失う。

博物館の装飾

ひとたび自分を見失ったら最後、この暗く深い森から抜け出るのは至難のわざだった。雪が溶けて、次の狩の季節がめぐって来たときに、たまたま誰かに見つけ出されるなら、それこそもっけの幸い。たいていは長い歳月を経た後に白い骨となってようやく生きた人間に巡り会う。黒い森は、死の森という意味でも黒く、深いのだった。

男は森を巡り歩いた。しかし身の危険は感じなかった。危険を知り抜いているからだ。決して危険に身を投じることがないのは、危険がわが身ひとつのものでないからでもある。率いる村の男たちの誰一人として傷つけても死なせてもならぬ。それが男の

使命だと言ってもいい。

だからこそ、集団とともにあるときにはできないことを一人の狩ではすることがある。それが無上の楽しみでもあった。

冬の狩、冬の森歩きは、男が自分に返ることのできる黄金の時間だった。森が自分のもののように思える、いや、自分が森になったように感じられる空間だった。

もちろん森は自分を遙かに超えた大きな存在で、人間は森のごく限られた一部分にしか触れることができない。そのことも男はよく承知している。触れることのできない、計り知れない領域を感じながら、

博物館の装飾

それとの境界をしっかりと見定めていることで、男は広大な神秘にふれつつ自身の安全を確保していた。少なくともこれまでには確かにそうだった。

しかし今、男は神秘の領域に憧れている。どうしようもなく憧れている。なぜならそこに白い豹がいるかもしれないからだ。白い豹を包み隠したものと、森はこれまでとまったく違ったふうに男を魅了し、さらには誘惑し、挑発した。境界を越えて行きたいという、胸が疼くような思いを初めて身に覚えて、男の心は今、大きく揺れていた。

それは慎重と大胆の相克だった。踏み込もうとする衝動がある。その裏にはうつつすらと恐怖が張り付

いている。そんな自分を引き留める理性がある。が、正しきの縁にはおのが怯懦へのいまいましい嫌悪もあつた。

なぜ白い豹を追うのか。男は自らに問うてみる。答えは見つからない。ただ漠然と思うのは、確かめたいのだ。確かめて何とする。何ともしない。ただ確かめたい。在るのか無いのか。在るとすれば、その先は、わからない。わからないから、そこまで進まないではいけない。

しかし自問自答を繰り返しつつ森の中をさまよっても、目指す獣はいっこうに気配をさとらせなかつた。あてどもなくさまよって、つまらない獲物を持

博物館の髪飾り

ち帰る日々。むなしさの陰が男の顔の彫りを深くしていった。

森に行かない日には、鍛冶場へ行った。そこは赤々と火が燃え、熱風が頬をかすめる。森の中とは別天地だった。

男は友に、白い豹について語った。村の古い言い伝えである白い豹のことは、もちろん鍛冶も聞いて知っている。その神聖も、その禁忌も、そして危険も。男が友に向ける言葉数は少なく、まるで独り言のようだ。詳しいことは語らないし、友のほうでも自分からは何ひとつ問い質そうとはしなかったが、

狩人の言うことが鍛冶にはわかるような気がするのだった。活動のありさまは正反対と言っているほどに異なるふたりだが、しかし思うこと、感じることがいつもどこかで一点に重なる。なぜかずっと昔からそうなのだった。

白い豹の話聞きながら鍛冶の脳裏に浮かぶのは、白い龍だった。狩人のように鍛冶もまた、一匹の生き物を追っていた。だがそれは果てしない原野の果てにいたのでなく、聞きされた炉のなかに出現する。

炉の温度を上げていくと、炎の色が変わってくる。黒ずんだ赤から明るい緋色になる。そしてもうここ

博物館の装飾

までと思われる頂点に達した頃、炉の上部に白い光がかすめることがあった。素早く身をくねらせるその白い光は、まるで細身の龍が踊っているように見える。

白い龍はまもなく姿を消す。炉の中が全面白色になってそのなかに昇天するように溶け込むこともあれば、黒みを帯びた影になって散乱し失われることもあった。もちろんまったく現れないこともある。それがどのような状況によるのか、鍛冶にはつかめないのであった。ただ炉の温度を上げればいいというものでないことは確かだ。送り込む風の具合なのか、あるいは燃やす木の種類や状態によるのか、は

たまた徐々に温度を上げていく速度によるのか、いろいろ試してみるのだが、どうにも原因がつかめない。

しかし現れる時は現れた。そしてその痕跡を焼かれている金属に残した。白い龍が現れた時、その背ビレか尾が触れた刀身は、熱の試練を抜けて冷えた後で、並の青銅とは一段ちがう深い光を放つのである。そして強度もまた格段のものであった。

そのようにして鍛冶は、白い龍の姿を探しあぐね、思わぬ出現に胸とどろかせ、消失に悩んでいた。白い豹を追うお前と同じように。そう鍛冶は心で思ったが、口には出さなかった。口に出して言うほどに

博物館の装飾

確信が持てないせいでもあったが、追っている獣が、友の追う白い豹よりもなお、存在の薄いもののように思われたからでもあった。狩人である友に輪をかけて寡黙な細工師だった。

男二人は黙して語らぬまま、心の中でそれぞれの獣を思った。

男はもう半ば諦めていた。白い獣が現れない日々が、すでに両手両足の指の数を超えている。

粉雪が舞い始め、一日降りしきる日もあった。雪が止んで陽が射した朝の美しさはたとえようもなかったが、寒さはいよいよ厳しく、身の危険は大きか

った。

眩しく照り映える雪景色のなかに、森の奥の暗がり、さらに深まりゆく闇となつて続いている。その遙かな奥の、視線も尽きるあたりに、男は白い豹を思い描くのだが、それはもはや白い色さえ失って、微かに小さく滲んでみえる影でしかなかった。

自分が追うから影が見える。追わなければ何も見えないのだろう、たぶん……。見えるような気がするあの影は、ほんとうは自分で追っている自分自身の影ではないか。男はそう思ってもう一度、眼を凝らし、自分かもしれない影を見つめたが、一旦そのように考えてしまうと、もう幻さえも、幻の影さえも

博物館の髪飾り

見えないのであった。

愚かなことよ、男は呟いて、自分を嗤った。もう来るのはやめよう。明日は家にいる。家で自分を待っている冬支度の、男の仕事をしなくてはならぬ。そう心に決めて、家に帰った。

もう止める。男はこれまでに何度もそう思った。しかし思うたびに無念の涙が胸にこみ上げる。思いを果たせない無力な自分と、それでも諦めきれない愚かな自分の両方に腹が立つ。泣きはしなかったが、こらえた涙が胸の奥に染みていった。しかし一晩ゆっくり眠って目を覚ますと、また森に行かずにはいられなかった。

確かめないままには止められない。いないならいないで、いないことがはっきりする時が、いつかくるはずだ。だめならだめで、金輪際だめと身に染みて思うことが、何かあるはずだ。今はまだ、その時ではない。そう思って家を出る。もはや白い豹を見つけるためではなかった。見つけることは、もう諦めていた。見つけることはできないのだと、みずから得心させるその時を待って、男は森へと足を運んだ。

そんなある日、短い日も暮れるまでにまだ少しあったが、男は帰るつもりになっていた。

もう森の奥を尖った眼差しで見つめることもせず、

博物館の髪飾り

この冬の見納めになるはずの雪景色をゆっくりと見回した。明日からはもう来るまい。男はそう考えていた。望んだように、断念するに足る決定的な事柄はなかったけれども、なぜかここまで突き動かしてきた執着の炎が消えていた。やみくもな思いが鎮まって、心の中にぽっかりと穏やかな空白が開けた。雪がしみじみと美しい。眼が洗われるとはこのことだ。そう思っただけで頭をめぐらした男の目と鼻の先に、白い豹がいた。

男はそのとき森の中に小さく開けた空き地に立っていた。そしてその獣は森の奥から空き地の縁まで出てきて、そこにしばし立ち止まったようであった。

体を斜めに向け、横目で男を見るようにして立っている。横目とはいえ、その瞳は男をまっすぐに射止めていた。警戒心も威嚇する気持ちも感じられない透き通った眼差しだった。

男は一瞬、心臓が止まったかと思った。いや、確かに止まっていたにちがいない。しばらくしてわれに返ったとき、まず気づいたのは、太鼓のように激しく打っている自分の心臓の鼓動だったから。

どのくらいの間だろう、男と豹はそのままじつと見つめ合っていた。そのあいだ、男は何もできずにいた。何をするとも思いつかなかった。強いて言うなら、探しあぐねた相手にめぐり会ったことに

博物館の装飾

感動していたのだが、しかしそれは驚きとも喜びともちがう、まったく別の心持ちだった。なすすべがない。そう、なすすべがなかった。

白い豹に出会ったら、それをどうするつもりだったのか。今さらながら、男は自分がそれについてまったく考えていなかったのに気がついた。狩人なのだから、獲物を見つけたら追い詰めて倒すのが当然であったかもしれない。現実には白い豹に出会うまでは、自然にそうした行動を取るにちがいないと思っていたような気もする。だが、それよりも会えない可能性のほうが大きかった。だからまずは見つけることが先決だった。見つけるために自分を駆り立て、

見つけられないことに絶望した。実際に見つけたらどうするのか、それはその時の話だった。

そうして今、美しい獣は目の前にいる。矢を射かけるにも近すぎるほどの距離で、男をじっと見つめている。その黒い瞳と銀色に光る毛並みに吸い込まれるように見入りながら、男はなすすべきことを知らなかった。

白い豹の瞳がこんなにも黒かったとは……。白い毛皮は純白ではなくて、微かな灰色の影がさす銀色だったのか。そのようなことを男はぼんやりと思って、ただ感嘆しているだけだった。

長い時が流れた。少なくとも、男にはそう思えた。

博物館の装飾

豹に出会う前と出会ってしまった今とではまったく別の世界にいるようだったので、その二つを隔てる時間を長いと感じたのだが、実際はどうだったのか。と、白い豹が動いた。振り返って男を見ていた目を前方に向け直し、暗い森の奥の方へと姿勢を直した。そして、優美にしなやかな一步を踏み出すと、次にまたもう一步を重ねて、男に後姿を見せながらゆっくりと遠ざかろうとする。

それは言いようもなく美しい姿だった。これまで獣という獣を追ってきた男は、その美しさを知り尽くしている。特に逃げ去る獣の美しさは、まさに飛び散る生命の輝きと言ってよく、その電撃的な輝き

に打たれて狩人は後を追わずにはいられない。しかしそれとても、今ゆっくりと歩み去ろうとしている白い豹の美しさに比べたら何ほどのことでもなかった。このためにこそ、今日までの人生があった。そう狩人は胸に重く直感した。

命の危険を感じて逃げる獣たちとはちがって、白い豹の後ろ姿は男を誘っているかのようにであった。迷いながらついてくる人間の歩みを測るように、ゆっくりと、吸引力のある歩調で豹は進んでいく。その甘い糸に絡め取られるように、いささかの迷いもなく、男はその後について森の奥深く入って行った。

博物館の髪飾り

5

妻はいよいよ気づかわしくなってきた。外には吹雪が吹き荒れている。それなのに、夫が家を空けてもう十の日数を超えていた。二人がいっしょになってこのかた初めてのことだ。

狩人である夫が家を留守にすることは、さほど珍しいことではなかった。村を挙げての狩は、厳しい冬には行われぬが、楽しみのために、あるいは家

族の食料の足しにするために小さな狩をすることは、禁じられてはいない。

もちろん幾つかの決まりはある。獣の仔や仔を孕んだ雌を倒してはならないとか、害もなく食料にもならないある種の獣は殺さないのが暗黙の了解だ。そうしたことは、村で育った男の子ならいつのまにか教えられて知っている。それでも、向こうから襲ってくることもあるし、まちがえて殺してしまうこともある。それは人も鳥も獣も同じ、自然に揉まれる命のやり取りだ。

そのような厳しい条件のもとで森と村が共存している秩序を守るのも、狩を仕切る者の責務のうち。

博物館の装飾

そしてまた一人で森に分け入って思わぬ危険に陥った村人を救い出すのも、折にふれては重要な職務となった。

そうしたあれこれのために、男は一人で森に行くことが多かった。じつを言えば、村の人びとを率いていくよりも一人で行く方がずっと楽しいとは、家族の前でも冗談半分にもらしていたことだ。森に分け入って一晩を過ごすこともないではない。

だが今度のように何日も続けて戻らないことはなかった。

気がかりなのは必ずしも身の危険ではない。それを言い出せば、日頃から危険と隣り合わせの生なりわい業

だ。がそれだけに判断力や慎重さも人並み優れている夫だから、信頼もできたし、妻にもそれなりの覚悟はある。

気になるのは、そうした男の盤石の精神をさえ揺るがすほどのもの。常軌の埒を越えて、男を突き動かすものだった。いつもの夫なら心配しない。しかし、そうでなくなつたとしたら…。

思いあぐねたある日、妻は鍛冶のもとを訪ねた。幼い時から仲のよかった友だから、何か知っていることがあるかもしれない。そう考えたのだが、じつはそれよりも、ただ重い胸の内を誰かに預けたかった。

博物館の髪飾り

友の妻を見た鍛冶は、すぐにその思いを察したようだった。黙って、いつも夫が座る場所に招じ入れたが、しかし何も言おうとはしなかった。そして、先刻までしていた作業をまた取り上げた。

働く鍛冶を見ているうちに、女の気持ちはなぜか次第に安らいでいった。男の背中とその向こうの炎を眺めながら、夫が好んでここに来る気持ちがわかるように思う。人が無心に働くに姿には、どこか見る人の心を鎮めるものがある。特に鍛冶の仕事ぶりは、激しい動きの中に瞑想にも似た不乱不動の境地があった。それを見ながら女は、自分は夫が働いているところを見たことがない。その本当の仕事場も、

働きぶりも知らないのだと、それまでついぞ考えたことのないことを考えた。

しばらく女をそのようにひとり放っておいた後に、鍛冶はようやく仕事の手を休め、そばへ来て坐った。女の夫が訪ねてきた時にそうするように。そしてしばらくは何も語らず黙っていた。

やがて鍛冶は重い口を開いて語り始めた。それは友であり夫である男のことではなく、自分の心に住む幻、白い龍のことだった。色を変え、形を変えて、白色の龍さながら登りつめるそれは夢に似て、消えた後は自分にさえも信じがたいものに思えたから、いままで人に話したことはないし、話す気にもなれ

博物館の髪飾り

なかった。その言葉は訥々と、声も低く、誰かに聞かせるというよりは、自分で確認しているだけのようだったが、しかし鍛冶はたしかに女のために話しているのだった。できることなら話さずにいたい、自分ひとりの胸の内に納めておきたい。なぜなら、求めるものはとらえどころがなく不確かで、それを追い求めることは苦しく、それでも探さずにいられない自分がさらにつらいからだ。にもかかわらず鍛冶は、友の妻のために語っていた。相手の心に届くのかどうかもわからず、役に立つかどうかともわからなかったが、悩みに曇る女に向けて、鍛冶は話した。

夫の友の言葉を、女は黙って聞いていた。口を挟

むことは何もなかった。狩人と鍛冶とはまったくちがう。仕事もちがったし、気質もちがった。それでも、何かを追いかけられるふたりの男の心には通じるものがあるのかもしれないと、女は思った。力を使い、汗を流して働く男の頭に、このような儂い幻が住みついて、それを細く尖った心で追い求めるとは、私たちの何と奇妙な、何と理不尽なことよ。女にはそんなことはありえない。雑多な家の用事に取り紛れ、こどもたちの世話に明け暮れ、周囲の人たちのために生きて自分を顧みるゆとりもない女には、自分ひとりの想念を追いかけておのが道を踏み外すなど、できもしないし、したいとも思わない。

博物館の髪飾り

女は少し腹を立てていた。腹を立てながら、夫の心にほんのわずか踏み込んだようにも感じていた。今まで見たことのないふうに夫を見ている自分があった。夫である男を、ほんとうは知らずにいたのかもしれない、そうとも思った。

鍛冶のもとを去った時、女の気持ちは来た時よりも穏やかに風いでいた。駄々っ子を思うように夫を思い、したいことをさせようという心の寛さが生まれていた。

それから数日が過ぎた。鍛冶を訪ねて以来、心を騒がせず、平常と変わらぬようにして夫の帰りを待とうと女は思い定め、日々の暮らしに心を傾けて過

ごした。丁寧に家を磨き、おいしい食事を整え、子どもたちや使用人に濃やかに接した。その裏には、他のことに気持ちを振り向けまいとする、少し頑なな思いもなくはなかったのだが。

夫は帰ってこなかった。帰らないということに、妻は少しずつ慣れていった。昼過ぎ、家の仕事片づいてホッと一息つくとき、ごく自然なことのように、今日も帰らないだろう、と思う。気の緩みと諦めがひとつに溶け合ったようなくあいだ。

少し前までは、といっても正確には何日前か思い出せないのだけれど、今日は帰るかもしれない、そう思ったものなのに、今はさりと、今日も帰らな

博物館の髪飾り

いのだろう、と考えている。それがあある意味、夫が帰らないことに慣れる、ということだった。帰らない夫を受け入れる、ということでもあった。

しかし、慣れるというのも受け入れるというのも、心の表面だけのことで、帰らない夫という、小さないこりが心の中の、下のほうに沈んで固まった。今日も帰らないだろうと思う度に、そのいこりが微かに動く。小さな痛みが伴うこともある。そしてその度、少しずつ大きくなっていく。

慣れるというのは、そういうことだった。

日常の生活に差し障りはなかった。主が獵に出て不在の間も、家と村の細々した差配は妻と古くから

の使用人で十分に足りる。そのようにしていつのまにか妻が腕利きになってしまったことがいけないのかと、考えることもないではない。さりとして、何をどうすればよかったのか。そこにいない夫のことで、あれこれ考えてもどうなるものではなかった。

こうしてまた、冬に閉ざされたまま、多くの日々が流れていった。

春の訪れの遅い土地である。地面はまだ固く凍りついたまま。いつからこうなのか、空気が暖かかった日々など、もうとうに忘れてしまったくらいだ。けれども気がつくとき、陽射しは日増しに明るくなってきている。頬をなでる冷たい風と、眼もとに弾け

博物館の髪飾り

る眩しい光が、人の心をこもごも波立たせる。それは堅く締まった氷の中心が秘かに緩み始めるのに似ていた。

女はある日、ふと思った。暗い森の中へ行ってみたらどうだろう。行ってどうなるものではない。それはよくわかっている。どうしようというつもりもない。夫が見つかるとも思っていない。そもそも、夫を探し出そうとしているのでもない。心を探ってみて、そう思った。

ただ、ここにこうして、じっとしているのはだめだと感じたのだ。夫のためではなく、自分のために。暗い冬の、それよりもなお暗い家に閉じこもったま

ま、静かに命を腐らせるのは良いことではないと。行ってみれば、森に足を踏み入れてみれば、そこに何かが見えるかもしれない。何かが開けるかもしれない。何もなくても、命に風を当てることはできるのではないか。

森に行くということを思いついてから、女の心はふしぎな張りを取り戻した。胸に芽生えたもくろみを覚られぬよう、こどもたちや使用人に向ける表情に気をつけるようになった。多少は無頓着になっていた日常の些末な事柄にも、前にもまして注意を払うようにもなった。何より、森の中を歩くであろう自分の体のことを考えなくてはならなかった。

博物館の髪飾り

村では、女は森に入らない慣わしだった。単純だが厳然たる決まりで、それまでそれに反した女はいなかった。いや、森を抜けて行った女がいたことはいた。夫ではない男と許されない仕儀に立ち至って、ふたりで森の奥に分け入ったという。ずいぶん昔のことだ。二人の消息はそれきり絶えたので、村の者は行き倒れて死んだのだと考えていた。暗く深い森を遙かに望めば、そのように考えるのが自然だった。

森に行つて、生きて帰った女はいない。知る限り、それが事実だった。

その森に行つてみよう、女は生まれて始めて考えた。

とはいえ、長く家を空けることはできない。夫は不在でもさしたる滞りはなかったが、その妻は、女主人は、朝に晩にいないではすまされない家の要だ。自由に動ける時間はない。ないのだけれど、日中、わずかに生じる空白の時間を使うことはできるかもしれない。

森の奥の神秘に触れるようなことは避けるとしても、せめてそのとば口にまで行ってみよう。そうすれば、そこで見えるもの、そこから広がるものがあるのではないか。

少しだけ、ほんの少しだけ。そう心に言い聞かせながら、女はある日、昼まだ明るい刻限にひそかに

博物館の髪飾り

家を出た。

女は足早に森に近づいた。これまで何度となく夫と男たちが行くのを見送った道。しかし自分では一度として踏み進んだことのない道である。村の中とその周辺の道なら眼を閉じていても歩けるほどに知り尽くしているが、森へ向かうその道だけは歩んだことがない。それは男たちの領分で、女が近づいてはならぬものと思い定めていたからだ。男たちの世界に踏み込まないことが、女が守るべき戒め、それを守るところに女としてのたしなみと尊厳があると、なぜかそのように信じてきた。

その道に、妻は足を踏み入れた。歩き始めてみればそれは何のことはない、他の道と変わらぬ、いや男の集団が通るために他よりも整備された、歩きやすい道だった。

走るように歩く女は、ほどなくして森の入り口に着いた。道はほんの少しだけ森の中に入り込み、そこに小さな平地を作っていたが、それで行き止まり。先はどこにも通じていなかった。

平地に立った女の脳裏に瞬時、大声で狩の指示を与える夫の姿が浮かんだ。が次の瞬間にはそれも消えて、するべきことへの、というよりはむしろ、してはいけないことへの焦りと怯えとがない交ぜに心を縛り上げた。一刻も早く分け入ろうとはやる気持

博物館の装飾

ちがある一方で、すぐにも踵を返したい思いが喉元にせり上げる。ここまで来たのだからもういいではないか、と言う声があり、いったい何のために来たのだ、という思いがけしかける。

結局その日はそこで止めにして、女は道を引き返した。たいしたことはない道のりを行き来しただけで、心はぐったりと疲れたが、反面、これまで覚えのない輝きも得た。

それ以来、折を見ては何日かに一度、女は森へ出かけて行った。

二度目に行った時は、最初近づく勇氣のなかった道なき道へ分け行った。

村から遠く見る森はほんとうに黒くて、なかは昼でも夜のように暗いのではと想像していたが、入って見ればあたりに光のないわけではなく、見上げると樹の枝を透かして小さな空もある。足元は大小の岩に大樹の盛り上がった根がごつごつと絡み、歩みにくいこと限りないが、しかし転ばぬように細心の注意を払えば、どちらへでも進もうとして進めないことはなかった。

ただ危険なのは、そのようにして場所を変えるうちに道に迷うことだ。いや、道は始めからないのである。迷うのではない。自分の居場所がわからなくなるのである。いったんわからなくなると、晴れてい

博物館の装飾

る日でさえ仄暗く、太陽のありかも見えない森は、紛ごうかたなき迷路になる。出口の見当がつかず、当てずっぽうで動くとますますわからなくなる。そのようにして人は、広大な森の中のきわめて小さな場所ですぐ迷いぬいて倒れる。

そのことを妻は夫から聞いて知っていた。夫は別段、妻に教えずにはならないと思っただけではないのだが、いわば職業的な知識の一端を、日常の雑談の種にすることがあった。

ともかくにも立ち位置を見失わないこと。そしてそこから一つ前の立ち位置、もう一つ前の立ち位置と、確かな目印で道筋を見つけ、見えない糸でつな

いでおいて、それを辿って戻れるようにしておく。それが何よりだいじなのだ。それを失ったらすべてを失う。世界と自分自身、そして命さえも。

天気の良い日を選んで、女は森へ行った。はじめは混沌としか見えず区別のつかなかったものに自分だけの目印をつけ、なじみの場所を作っていた。

見知った領域ができてみると、森はすてきな天地だった。樹木の深い白い、葉の茂みから差し込む陽光の光、揺れて耳をなぶる風の音。それらのものに触れているだけで、体の隅々にまで生気が行き渡るような気がする。女は森の魅惑に浸されて、今まで覚えのなかった心境に少しずつなじんでいった。

博物館の髪飾り

森で過ごして帰った後は、多くの煩いから解き放たれたように清々しい心持ちでいられる。家のなかの面倒事も、人とのつきあいに伴う厭わしさも、どれも些末なことに思われて、苦もなくやり過ごすことができるのだった。

心の中に渦巻く汚泥のような想念に耐えられず、無我夢中でその只中に身を投じるように森へ行っただのに、遠くから見ると森は心の闇そのものと見えたのに、その森はふしぎなことに、心と体の重荷を解放してくれたのだ。

何日も森へ行けない日が続くと、心に鬱積するものがある。森へ行きたくて待ち焦がれている自分に

気づく。なぜ森へ入ったのであったか、女はいつか当初の目的さえどうでもよくなっていた。

森の中で、女はさまざまなことを考えた。考えるというよりは、それまでとまったくちがう気持ちになっただけで、苦しんでいた以前の自分を省みた。

これまでひたすら自重して、目の前の道を外さないことが何より大切と生きてきた。けれど森の中には道がない。親や夫、こどもたち、そして使用人に囲まれて、そういう親しくいとおしい人たちの思うことを感じることも、自分の取るべき行動の指針だと信じてきた。その人々なしには自分も存在しないように思っていたが、森のなかではたったひとり、誰

博物館の髪飾り

もそばにいない。そして誰もいないことがほんとうに楽で、想像もしなかったことに、うれしいのだ。これまで思っていたのとは違う生き方があるのかもしれないと、女は感じ始めていた。

これまで深く思いやったこともない人たちの身上を、これまで考えもしなかったふうに考えた。たとえば、夫でない人を愛して森へ逃れたという村の女。森へ行ったということとは、村人にとっては破滅に向かったというのと同じだった。獣のように闇をさまよい、命果てたのだと思われていた。従順な少女であり、身持ち正しい妻であった女には、それ以外のことは思い及ばなかった。

だが、必ずしもそうではなかったのかもしれないと、今は思う。文字通り道なき道を拓きながら、生きていくことはできたかもしれないのだ。そのようにして、どこか知らない天地で、あの二人は今も生き延びているのかもしれない。なぜなら、道はないが、その代わりに新しく道を作ることができる。少しずつ少しずつでも、自らの生きる天地を切り拓き、整えるということが、人にはできるのだから。

そしてまた夫も……。と思いかけて、女は考えるのをやめた。静かに充足していた心に、奥底から暗く熱いうねりが沸き起こって、女の思いをかき乱す。夫については、夫のことだけは、他人事と思うこと

博物館の髪飾り

も、しらじらと許すこともはできはしない。できはしない。わけもなく激しい熱が、まるで飛沫を蹴散らす高波のように突き上げる。怒りのようでもあるし、そのくせ慕わしきでもあるような：、それがないまぜになって女の心を締め上げる。

それはいまだ経験したこともない怒濤のような狂おしさだった。家にいて夫を案じた時も、意を決して森に足を踏み入れた時も、このような気持ちに揺すぶられたことはなかった。女は自分のなかにこれほどの激しさがあったことに驚いた。

あまりにも澄んだ森の空気のなせるわざなのだろうか。雪の原にうずくまり、腕に顔を伏せて、女は



気持ちか鎮まるのを長いこと待たねばならなかった。この妖しげな乱れに捕らわれるまままでいたら、果てはこの身が減ぶ。そうはさせまいと、ひたすらそのことだけを念じて、心の嵐をやり過ごした。

森の静寂にはふしぎな熱狂も潜んでいる。それをしっかりと見分けないことには、狂って身を滅ぼす危険がある。女はそう肝に銘じた。

それでも、たったひとり森歩きを女はつづけていった。家の事情で何日も行けないこともあったし、いったい何のために森に行くのか、その理由さえも今は定かにわからぬようであったが、それでもやめはしなかった。折々の孤独な行動が心を寛やかに健

博物館の髪飾り

やかにしてくれるようにも感じて、夫の跡を見つげることができないことはさほど気にもせず、森を歩いた。

女にとって、森はいくばくか自分の領分になりつつあった。もちろん、森全体から見れば取るに足りない小さな地平にすぎない。それでも自分にとって確かな地歩だ。自然は途方もなく広大で、人間はケシ粒のようなもの。女はそのことを実感した。家については思いもおよばぬことだったろう。

夫を見つけるといふ始めの目的もほとんど忘れて、女は森を歩いた。いくら歩いても森は深まるばかり、神秘はいや増すばかりだったが、これまでに歩いた

小さな領域は、確かに自分のものとなったように感じていた。時に肌を刺す恐れや驚きが感覚をますます研ぎ澄まし、女は自分でもわかるほどに鋭敏になっていった。いや、そうではない、鋭敏になったと肌身を感じた時、女は始めて自分を知ったのだった。こんなふうに自分自身を感じたことはなかった。これまで生きてきて、自分というものをこんなふうに捉えたのははじめてだった。

春は歩みを進めていた。地面はまだ凍って堅く冷たかったが、樹木の間をくぐり抜ける陽の光は少しずつ眩しさを増して眼を焼いた。冬を越えて甦る自然の力には驚嘆すべき逞しさがあった。

博物館の髪飾り

そんなある日、妻は夫を見つけた。思いもしない発見だった。

その日、天気が殊のほか穏やかな折にそうするうちに、女は少しだけ足を延ばしてみた。目の前に、見知ったなだらかな傾斜がある。そこまでは何度も来たことがあったが、その向こう側に入り込んでみたことはなかった。引き返そうとすればいつでもできそうな場所だ。慎重にそのことを確かめてから、坂の下をゆっくり回って向こう側へ出た。すると、さして高くもない崖が衝立のように続いていて、その斜めに切り立つ壁面に幾つか洞があるのが見えた。

その二番目の、一番大きな洞の入り口から少し入ったところに夫の姿があったのだ。

夫は横たわっていた。うつ伏せぎみに顔だけ横に向けて、寝ているように見えた。片腕を頭より上に伸ばし、その二の腕に頭を乗せている。まるで何かをつかみ取るうとしていようなその姿勢に促されて、洞の奥に眼をやると、そこに白い豹がいた。豹もまた眠っているのか、彫像のように動かない。彫像のように美しい形だった。

一瞬、女は身を固くして二つの動かぬ像を凝視した。そして次の瞬間にはもう身をひるがえしてその場を去っていた。

探していたはずなのに、見つけたことに衝撃を受

博物館の髪飾り

けていた。見てはいけないものを見た。見たくなかった。逃げ去る女の胸をそんな思いが渦巻いていた。

息をはずませて家に戻った女が、まずしたことは、頭の髪飾りを抜くことだった。ばらりとほぐれた髪を女は長い時間をかけて丁寧に櫛けずった。そしてもう一度きれいにまとめ上げると、別の髪留めを探し出して、髷を止めた。

そのとき以来、女は森へ行かなくなった。そして女の髪にいつもあった髪飾りも、二度と見られなくなった。

それから、女は平静的な日々を送っていると、傍

目には見えた。けれども女の内面には絶えざる問いが荒れ狂っていた。それはまるで大きな波のように高まってうねり、ねじれて砕けた。砕けて血が引くように下がるとまた下の下から突き上げて、高まってうねり、ねじれて砕ける。それを際限なく繰り返した。

あれはいったい何だったのか、女は声には出さず叫ぶ。自分が見たのは、ほんとうのことだったのだろうか。

夫がいた。そして白い豹がいた。二つの生き物はあそこで何をしていたのか。

狩人がついに獲物を追い詰めて、そしてともども

博物館の髪飾り

精魂尽き果て、倒れたのであつたらうか。眠っているように見えたが、生きていたのか。まさか死んでいたのではあるまいか。

あるいはまた、幻の獣と人間の男はいかなるゆえか共生し、安息に満ちた眠りをむさぼっていたのだろうか。

女は思う。人間の男にとって、白い獣はどういう存在だったのか。男は獣を狩っていたのか。それともその後にはすがってつきまとったのか。または神を守るように護っていたのか。獣に向かって差し伸ばされた男の腕は、何を言おうとしていたのか。

もしかするとあの人と獣は、雄と雌として惹かれ合い、愛し合ったのではないか。女にはそうとも想われた。愛を交わした後でひとときの満ち足りた疲れを眠る、そんな動物の番いのように見えないこともなかった。そうは考えたくなかったけれど、ほんとうはそれが一番ありそうな寝姿だった。そう思う女の脳裏には、人と獣の絡み合う妖しいさまが浮かんできて、そのあまりの美しさに打ちのめされ、息を弾ませておのが乳房をつかんだ。

自分の眼が見たものを、女はくりかえし思い描いた。そうしては、その意味を考えた。しかし何度考えても、答えは出なかった。そのうちに、目に焼きついたように思った姿がしだいに揺らぎ始めた。や

博物館の髪飾り

がて、ほんとうに見たのであったか、それさえも疑わしくなってくる。もしかすると、あれは幻だったのではないか。こちらの妄念が生み出したかげろうだったのかもしれない。白い豹と見えたのは、消え残った雪だったのかもしれないし、洞窟の仄暗い岩陰にたまたま射し込んだ陽光の照り返しだったのかもしれない。そうではないという確証は、今やどこにもなかった。

そしてまた女はこうも思った。あの白い豹はもしかするとわが身の影だったのではないか。おのが思いがゆらゆらと漂い出て、雲のように淡い形を成したのではないか。そうではないと、誰に言えるだろうか、と。

遅い春が、しかし待たせた分をつぐなうように駆け足でやって来た。人々は咲き始めた花々の香に酔いしれて野を歩き、昼は畑仕事に精を出して、夜はぐっすりと眠った。

そんなある日、男は帰ってきた。男には冬の臭いがしみついていて、瘦せた男の体は長かったその冬の最後のかげらのようだった。

迎えた妻は、夫の顔を見上げた。その無言の問いかけに夫は、

「消えた」

とひと言、低く呟いた。

博物館の髪飾り

何が消えたのだろう、白い獣が消え去ったのか、それとも男の執着が消えたのか、あるいは単に雪が消えたと言ってるのだろうか。そのどれとも取れる言いようだったが、妻は問い返すことはしなかった。こうして夫と妻の長い冬が終わった。長かったが、ひと冬のことだった。

6

月日が流れた。親たちが、そのまた親たちが、幾つもの世代を重ねながら生きてきたのと同じ歳月の緩やかなくなりかえしだった。

赤く輝いていた髪がいつしか白みを帯びた亜麻色になったのをていねいに櫛けずりながら、妻は過ぎてきた時代を振り返って、河の流れのように平穏な日々だったと思う。雨や風の荒れ狂うことはあるし、

博物館の髪飾り

そうなると河も水嵩を増し、高く波打って、時には地に溢れる。けれどもしばらくすると元に戻って、また穏やかに、絶えることなく流れて行く。けっして絶えることがない。それが人の世に似ている。だから、何があったとしても、日々は穏やかなくなりかえしなのだ。

夫が白い豹を追った冬のことを、妻が思い出すのは稀だった。考えまいと心に決めたわけではなかったが、思い出すたびに心の波頭は低く円くなり、やがて思い出すことも少なくなった。まるで嵐が過ぎた後の河のようだった。

けれども確かに言えるのは、あの時以来、夫が変わったということだ。あの冬までは感じられた男の棘が、帰ってきた夫には無くなっていった。それが良いことなのか悪いことなのか、妻にはわからない。かつて夫の眼の中に燃えていた男の棘は、若い妻の胸を刺し、うっすらと血を滲ませた。その痛みが胸を高鳴らせもした。それがなくなった今は、穏やかだけれど、それだけのようにも思える。それだけだが、それが何より大切だと思ふこともある。

良い夫婦だと村人は言った。夫婦の手本だ、と。それを言われると、夫も妻も苦笑いする。そうではないとでも言いたげに。しかし敢えて否定しようともしなかった。

博物館の装飾

狩を巧みとすること、村を治めること、その二つの異質な力量を備えるのは、世に望み難いことだが、この夫にはこの妻があつて、脇を支え、留守の間を補つてきたからできたのだと、そう言われると、二人とも何も言わずに口を閉ざすのだった。そのとおりだったからだ。

やがて男が亡くなった。いかにも早い死だと人々は惜しんだが、長らく狩を統率し、また独りでも危険な森歩きをして、体に無理がかかつていたのだろうと話し合つた。

後を長子が継ぐことが、誰言うことなく、暗黙の了解となつた。いまだ成年に達しない若さだったが、

優れた狩の手腕はすでに人を瞠目させていた。

幼いと言つていい年頃から、狩に行きたがつた父が独りで森歩きをする時に、気が向くと連れて歩いたから、遊びが修練になつたのだと母は言ったが、理由はそれだけではなさそうだった。狩には学んで得られる知識と、生まれつきの適性がある。この長子の場合、生まれつきの天分が際立っていた。あわやという瞬間の判断と行動に、いわば神がかりのものがあつて、それを実際に見た年配の男たちは、まるで狩るために生まれてきた獣のような俊敏さだと言つた。父親も人に優れた素質の持ち主だったが、息子はそれをさらに越えている、と。

博物館の髪飾り

将来、狩の頭領となるべき器について、疑いを口にする者はいなかった。父の死後しばらくのあいだは、父の補佐をしていた初老の男が狩の頭に立ち、その脇を固める役回りだったが、数年の後には、衆目の信頼を集めた辣腕の頭領に育っていた。

長子にひきかえ、次子は狩を好まなかった。家について故事を学び、思索する。それを母方の祖父に習った。ほんの赤子の頃から、次子は祖父といふことを好んで、暇があると遊びに行った。祖父のほうでも、心の通じ合う幼な子を、自身ついに持ち得なかった息子のように愛して、よく面倒を見た。その片言に耳を傾け、それに対して真剣に、あたかもおと

なに対するがごとく応えるのだった。こうして次子は老いた知者の深い叡智を母乳のように、離乳食のように、噛み砕かれ吸収しやすい形で呑み込んでいった。思索とことばは幼い次子のおもちゃだった。

次子はまた幼い時からよく母の助けをする子だった。母のする屋内の仕事が性に合っていたせいかもしれない。母のほうでも、この息子にはよく相談を持ちかけたものだ。こんな小さな子に、と見ている人びとはあきれたが、ふしぎにいつも理に適った答が返ってくる。少年の落ち着いた深い眼の色を見ていると、母は迷いを抜けて心を決めることができた。

村の長である夫の死後も、妻はその仕事を引き受

博物館の装飾

けていた。とはいえ長の座を引き継いだのではなく、実際に事に当たって村をとりまとめてきたのは長の妻だということ、もはや知らぬ者がなかったからである。こうして妻は、少年をそばに置いて、それに支えられつつ、村の柱になっていった。

兄弟が成人した時、村には狩を率いる頭領と日々の暮らしを治める長とがいた。二人の適性と資質は誰の目にも明らかかなほどちがっていて、しかもそれぞれ司る領域がはっきり別れていたから、二人の間に軋轢はなかった。それよりも村を揺るがしかねない大きな出来事が起こったとき、二人がおのおの知恵と力を出し合って事に当たるさまは、人びとびとは感じるのであった。

村はかつてないほど穏やかで、災厄から守られていた。もちろん人の暮らしのあるところ小さな面倒の絶えることはないが、その対処が理に適っている。人びとは上に立つ二人に厚い信頼を寄せていた。

あるとき、狩の長を白豹の子という異名で呼ぶ者がいた。ふしぎな言いようなので、なぜかと問い質したが、答えることができない。ただ祖父の長兄がそう言うのを聞いたことがあると言うばかりだ。しかし祖父もその兄もすでに亡くなっていたので、ほ

博物館の髪飾り

んとうにそう言ったのかどうか、それすら真偽のほどは確かめようがないのであった。

村の長たちの母は、その頃まだ存命であった。息子らに実務を譲り渡した後は、おおかた家の奥の自室に引きこもって、傍目には茫漠とした境涯を送っていた。その老婆に「白豹の子」の由来を訊ねたのは、何とぶしつけな慮外者であったことか。後で聞いて、人びとは身震いを抑えきれなかったが、その結果もまた思いの外だった。

老いた母は「白豹の子」と耳にして、眼を遙か彼方にさまよわせた。それから何とも言いようのない微笑みを浮かべたというのである。肯定もせず否定

もせず、ただ空にまで溶け込むような遙かな笑み。それはまるで長い雨の後の鮮やかな虹のようで、虹のようにひととき多彩な色と光を放って形をなし、いつともなく消えたそうなの。

だが、森の危険な獣を追って狩が最も緊迫する瞬間、頭領のめざましい働きを見た男たちは、あれは人間のなせる技ではないと語った。神がかり、あるいは自らも猛る獣のようであったと。そんな時には、白豹の子という呼び名も至極当然に思われるのだった。

白豹の子、人はそう呼んだ。時に白豹の子たち、と兄弟ふたりを指して言うこともあった。

博物館の髪飾り

それからまた幾たびかの年を重ねて、老いた母が亡くなった。子どもたち孫たちに囲まれて幸せな暮らしだと人々は言い、そう言われて本人もただ微笑むばかりだったが、心はいつも遠い何かを追っているように見えた。息を引き取った時には、その何かとひとつになったのだと、そんなふうに近親の者たちは感じたものだ。

死者の枕の下に、青銅の小さな器物があった。身近で世話をしていた長の妻も、娘も、それを見た覚えがなく、何なのかわからなかった。しかし、亡き人にとって大切なものであったことは確かだと思われたので、棺の中の波打つ白い髪の傍らに置いて、

ともに埋葬した。

村は平和な時を送っていった。争いも少なく、暮らしに困ることがないのは、村の長たちの守り神、白豹のおかげだと人々は言い伝えた。

*

*

*

*

時は紀元二十世紀と呼ばれる時代の末、ドイツとの国境に近い北フランスのある街に、こじんまりした考古学博物館があった。

博物館の髪飾り

仄暗いガラスケースの中には、近隣の発掘調査から出土した物品を飾ってある。その数も決して多いとは言えず、ほとんどが刀や槍の穂先などの戦闘具、もしくは狩猟の道具である。装飾も少なく、見るからに質朴。こうした物品がまさに日常の実用品であった時代を忍ばせた。

片隅に、その物はあった。片手に納まるほどの大きさで、伏せた舟形の両端に小さな穴がある。表面に彫りの浅い微かな文様があるところが、他の品々とちがっている。

目立たぬながら、なぜか心を留めないではいられない髪飾りだった。

(おわり)

博物館の装飾